

上野平遺跡

—国道338号交通安全対策事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2022年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、令和2年度に国道338号交通安全対策事業予定地内に所在する上野平遺跡の発掘調査を実施しました。

本遺跡は、むつ市川内町の宿野部地区の海に面した段丘上に位置しており、鯛島や大島（夏泊崎）・岩木山を望むことができます。過去の調査で平安時代の製塩に関連すると思われる遺構や中世の人骨等が見つかっていることから、注目されてきた遺跡もあります。

今回の調査の結果、縄文時代及び平安時代の遺構や遺物を確認しました。特に、下北半島では検出例の少ない平安時代の竪穴建物跡を確認したことは注目されます。

この調査成果が今後、埋蔵文化財の保護のために広く活用され、また地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきましたむつ市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、心より感謝いたします。

令和4年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 葛西 浩一

例　言・凡　例

1 本報告書は、青森県県土整備部道路課による国道338号交通安全対策事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和2年度に発掘調査を実施したむつ市上野平遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は、1,500m²である。

2 上野平遺跡の所在地は青森県むつ市川内町宿野部上野平地内、青森県遺跡番号は208097である。

3 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。

4 本報告書に関する発掘調査から整理・報告書作成までの間は、以下のとおりである。

発掘調査期間 令和2年5月12日～同年7月17日

整理・報告書作成期間 令和3年4月1日～令和4年3月31日

5 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター平山明寿文化財保護主幹、笹森一朗文化財保護主幹が担当した。依頼原稿及び委託原稿については、文頭に執筆者名あるいは機関を記した。発掘調査成果の一部は、ホームページや発掘調査報告等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書が優先する。

6 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

遺跡・遺構の空中写真撮影 有限会社 無限

放射性炭素年代測定および

炭素・窒素安定同位体比測定分析 株式会社 バレオ・ラボ

遺物の写真撮影 有限会社 無限

遺物写真切り抜き 株式会社 知立造園

7 遺跡及び周辺の地形・地質の原稿は根本 直樹氏（国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科）に依頼した。

8 石器の石質鑑定は調査員島口 天氏（青森県立郷土館）に依頼した。

9 火山灰の分析は佐々木実氏（国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科）に依頼した。

10 本書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は、国土地理院発行の地図を合成・加工して使用した。

11 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。挿図中の方位は、すべて座標北を示している。

12 遺構には、その種類を示すアルファベットの略号に検出順位を示す算用数字を組み合わせた略称を遺構ごとに付した。遺構に使用した略号・略称は以下のとおりである。

SI：竪穴建物跡 SK：土坑 SN：焼土遺構

13 遺物については、取り上げ順に種別ごとの略号と番号を付した。略号は、以下のとおりである。

P：土器 S：石器 C：炭化材

14 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。各土層の色調表記

等には、『新版標準土色帖2006年版』（小山正忠・竹原秀雄）を基に記録した。土層断面図には水準点を基にした海拔標高を付した。

- 15 各挿図中の遺構実測図の縮尺は、原則として、堅穴建物跡・土坑・焼土遺構は1/60とし、スケールを示した。地形図・調査区域図・遺構配置図等は適宜縮尺を選択し、各挿図にスケールを示した。使用した網掛けは、下記のとおりである。



炭化物範囲



焼土範囲

- 16 各遺構の規模に関する計測値は、原則として現存値を記載している。構築時の形状・規模を把握出来ない事例（他遺構・搅乱による破壊、調査区域外への延伸等）については、（ ）を付して、現存値を示した。

- 17 遺物実測図の個別番号は、図版ごとに1から遺物番号を付した。
- 18 遺物実測図の縮尺は、土器類1/3、剥片石器類1/2、礫石器類1/3、鉄生産関連遺物1/3、銭貨1/1を原則とし、各挿図にスケールを示した。また遺物実測図に使用した網掛けは、下記のとおりである。



炭化物付着範囲(強)
煤付着範囲



炭化物付着範囲
被熱範囲(強)



内燃処理
被熱範囲



磨痕

- 19 各遺物写真には遺物実測図と共に図番号を付しており、縮尺は不同である。
- 20 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 21 発掘調査及び整理、報告書作成に際して、下記の機関・個人からご協力、ご指導を得た。
川内公民館、宿野部町会、多善寺、東通村教育委員会、むつ市川内庁舎、むつ市教育委員会、むつ市脇野沢庁舎、榎沼正悦、榎原博文

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次・写真図版目次・表目次

第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査及び整理体制	2
第4節 発掘・整理作業経過	3
第2章 遺跡の環境	5
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	5
第2節 上野平遺跡及び周辺の地形・地質について	8
1 上野平遺跡の位置と周辺の地形の概要	8
2 上野平遺跡周辺の地質	9
第3節 上野平遺跡の基本土層	12
第3章 検出遺構と出土遺物	16
第1節 概要	16
第2節 検出遺構と出土遺物	16
1 堅穴建物跡	16
2 土坑	22
3 焼土遺構	24
第3節 遺構外出土遺物	25
第4章 自然科学分析	32
第1節 上野平遺跡出土の火山灰について	32
第2節 放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体比測定	35
第5章 総括	42
第1節 縄文時代の上野平遺跡について	42
第2節 平安時代の上野平遺跡について	44
1 遺構について	44
2 遺物について	45
3 平安時代の様相について	49
引用参考文献	52
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図1	遺跡位置図	7
図2	上野平遺跡周辺の地形分類図	8
図3	上野平遺跡周辺の水系図	9
図4	上野平遺跡周辺の地質図	10
図5	基本土層図	13
図6	路線図・調査区域図	14
図7	遺構配置図	15
図8	第1号竪穴建物跡(新)(1)	18
図9	第1号竪穴建物跡(新)(2)	19
図10	第1号竪穴建物跡(旧)	21
図11	土坑・焼土遺構	23
図12	遺構外出土遺物(1)	29
図13	遺構外出土遺物(2)	30
図14	遺構外出土遺物(3)	31
図15	上野平遺跡出土遺物集成図(1)	46
図16	上野平遺跡出土遺物集成図(2)	47
図17	上野平遺跡の土地利用状況	51

写真図版目次

写真1	遺跡近景	57
写真2	遺跡遠景・基本土層	58
写真3	作業状況	59
写真4	第1号竪穴建物跡(新)(1)	60
写真5	第1号竪穴建物跡(新)(2)	61
写真6	第1号竪穴建物跡(旧)	62
写真7	土坑	63
写真8	焼土遺構(1)	64
写真9	焼土遺構(2)	65
写真10	調査完了状況(1)	66
写真11	調査完了状況(2)	67
写真12	遺構内出土遺物	68
写真13~14	遺構外出土遺物(1)~(2)	69

表目次

表1	上野平遺跡と周辺の遺跡一覧	6
表2	石器組成表	42
表3	土器観察表	54
表4	石器観察表	55
表5	土製支脚観察表	55
表6	鉄生産関連遺物観察表	56
表7	陶磁器観察表	56
表8	錢貨観察表	56

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

国道338号交通安全対策事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては、平成29年度から青森県県土整備部道路課及び下北地域県民局地域整備部道路施設・高規格道路建設課（以下「道路施設課」）と青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」）が継続的に協議・踏査を重ねてきた。用地買収や立木伐採等上物撤去の進捗状況に合わせて、令和元年8月に文化財保護課が試掘調査を行ったところ、遺構（焼土遺構）や遺物（土師器）が確認されたことから、工事用センター杭No. 3～8間について遺跡の範囲変更を行い、工事用センター杭No. 4～7間については工事施工前の本発掘調査が必要であるとした（青森県教育委員会2020）。

この結果を受け、再度道路施設課と文化財保護課との間で協議を行ったが遺跡の現状保存が困難であることから、工事優先箇所や他調査事業との調整を経て、令和2年度に上野平遺跡の本発掘調査を実施する計画とし、青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当することとなった。

なお、令和2年2月28日付け下県局整備第1286号で下北地域県民局長から文化財保護法第94条第1項の土木工事等のための発掘に関する通知がなされ、青森県教育委員会教育長が令和2年3月6日付け青教文第1411号で工事着手前の本発掘調査（記録保存調査）を指示している。

第2節 調査の方法

1 発掘作業の方法

〔測量基準点・水準杭の設置・グリッド設定〕調査区設定・遺構測量に用いた基準点は、調査区の内外に打設されていた工事用基準（4級基準点）を利用した。基準点からの測量に支障が生じた場合、調査区内の任意点に座標を移動し使用した。グリッドは世界測地系による国土座標値を基準として $4 \times 4\text{ m}$ に設定した。原点A-1は平面直角座標第X系のX=130,300、Y=8,000とした。各グリッドは南から北方向にアルファベットを、西から東方向に算用数字を1から付し、南北隅の組み合わせで呼称した。

〔基本土層〕基本土層は、試掘調査の結果を踏まえ、調査区の堆積を把握できるように、主に調査区壁面で確認し、上位から層順に第Ⅰ層、第Ⅱ層とローマ数字を付した。基本土層は、土層観察時に色調や混入物により第V a・第V b層などと細別した箇所もあるが、遺物取り上げは大別層ごとに行つた。

〔表土等の調査〕試掘調査成果を踏まえ、表土の除去には重機を用いて掘削の省力化を図った。遺構外出土と判断した遺物は、調査グリッドと出土層等を記録し取り上げた。

〔遺構の調査〕遺構の検出は主に基本土層の第Ⅱ層もしくは第Ⅲ層上面で行った。検出遺構は、原則として確認順に番号を付し、略称との組み合わせで呼称した。堆積土層観察用のセクションベルトは、主に土坑・焼土遺構は2分割、堅穴建物跡は4分割で設定し、調査を行った。遺構内堆積土には、確認面から順に層序番号を算用数字で付し、ローマ数字の基本土層と区別した。遺構内遺物の出土位置の記録は、ソキア製トータルステーションによる測量点を元に、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」によるデジタル測量によった。堅穴建物跡、土坑等の平面図および堆積土の断面図は、グ

リッド杭を用いた簡易造り方測量または前述のデジタル測量のいずれかによって、原則として縮尺1/20の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、層位ごとに取り上げた。また、出土状況によっては、遺物微細図の作成も行った。

〔写真撮影〕原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサル、および約1,800万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の検出・精査状況、完掘後の全景等を記録した。

2 整理・報告書作成作業の方法

〔図面類の整理〕遺構は、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」で作成した平面図・堆積土層断面図または簡易造り方実測で作成した堆積土層断面図の調整を行った。

〔写真類の整理〕35mmモノクロームフィルム及び35mmカラーリバーサルフィルムは撮影順にアルバムに整理収納し、デジタルカメラのデータは遺構ごとに整理し、HDDに保存した。

〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕遺物の注記は、調査年度、遺跡名、遺構名またはグリッド、出土層位、取り上げ番号を略記した。直接注記できないものは、収納した袋に記載した。

〔報告書掲載遺物の選別と観察・図化〕縄文土器・土師器・須恵器・擦文土器・陶磁器については、時期・型式毎に分類した上で、遺構の構築時期を示す資料、時期・型式の特徴を良く表す復元資料を主として選別した。その他の遺物については、器種毎に分類した上で、遺構に伴って出土した資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料を主として選別した。

一定の形状を復元した資料や遺構の構築時期を示す資料については、原則として実測図を作成して形状・特徴等を記録し、観察表を作成した。

〔遺物の写真撮影〕有限会社無限に委託して実施した。質感や製作技法等を表現するよう留意して撮影した。

〔自然科学分析〕石器の石材産地を同定するために石質鑑定を調査員島口 天氏に依頼した。土器付着炭化物の年代や由来を明らかにするため、放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体比測定分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。

〔遺物の実測・遺物写真切り抜き〕土器・剥片石器・礫石器のトレースは、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」もしくは「遺物実測支援システム」またはアドビ株式会社製Illustratorを用いて行った。遺物写真の切り抜きは、株式会社知立造園に委託した。写真図版はアドビ株式会社製Photoshopで調整した。版下はアドビ株式会社製InDesignおよびIllustratorを用いて行った。

第3節 調査及び整理体制

1 発掘調査体制

発掘調査体制は以下のとおりである。

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 佐藤 穎人（現青森県立図書館長・近代文学館長）

次長（総務GM） 川村 和夫（現梵珠少年自然の家所長）

調査第二GM 斎藤 岳

文化財保護主幹 平山 明寿（発掘調査担当者）
 文化財保護主幹 笹森 一朗（発掘調査担当者）
 文化財保護主事 藤田 祐（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員 三浦 圭介	青森中央学院大学非常勤講師（考古学）
〃 工藤 竹久	青森県文化財保護審議会委員（考古学）
〃 根本 直樹	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師（地質学）
〃 島口 天	青森県立郷土館 学芸課長（地質学）

2 整理・報告書作成体制

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 葛西 浩一
総務GM 油布 恵美
調査第二GM 斎藤 岳
文化財保護主幹 平山 明寿（報告書作成担当者）
文化財保護主幹 笹森 一朗（報告書作成担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員 島口 天	青森県立郷土館 学芸課長（地質学）
----------	-------------------

第4節 発掘・整理作業経過

1 発掘作業の経過

上野平遺跡の発掘調査は、令和2年5月12日から開始し、同年7月17日に終了した。発掘作業の経過は以下のとおりである。

- 5月12日 発掘調査作業員に作業の説明等や発掘調査器材等の搬入を行い、発掘調査を開始した。
- 5月中～下旬 新型コロナウイルス感染症防止対策で職員をローテーションしながら発掘作業を行った。過去の調査の痕跡や遺構（土坑・焼土遺構）を検出した。
- 6月上～中旬 職員3人揃っての調査を開始した。第II層の調査を終了し、引き続き第III層の調査を行った。
- 6月下旬 作業員を追加雇用した。調査区北東隅から竪穴建物跡を検出したため、文化財保護課と事業者との協議により調査範囲を拡張した。
- 7月上旬 竪穴建物跡の精査を行った。第III層の調査を終了し、第IV層の調査を行った。2日に発掘調査に係る鑑定等の指導を調査員から受けた。また、10日に遺跡・遺構の空中写真撮影を行った。
- 7月17日 発掘調査機材等の片付け・清掃を行い、器材・出土遺物等を県埋蔵文化財調査センターへと搬送し、すべての作業を終了した。

2 整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業は令和3年4月1日から令和4年3月31日までの期間で行った。発掘調査では段ボール箱換算で4箱の土器類、石器類、鉄生産関連遺物、陶磁器が出土した。のことから、これらに応じた整理作業の工程を計画した。報告書は遺構や遺物の数に応じた分量を各々の記載にあてるにした。

整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

- | | |
|-------|--|
| 4月 | 石器の分類と選別を行った。 |
| 5月 | 土器・石器の数量計測を行い、遺構内出土土器から接合作業を行った。 |
| 6～7月 | 接合・復元が進んだ土器の選別を行い、採拓と断面実測を行った。縞石器の実測を行った。 |
| 8～9月 | 土器・縞石器のトレースを行った。 |
| 10月 | 土器・石器以外の遺物の選別を行った。遺構図の調整を開始した。 |
| 11月 | 剥片石器の実測図作成とトレースを行った。資料化が完了したものから、各種図版作成作業と共に報告書掲載遺物觀察表の作成を行った。また、遺物の写真撮影を行うとともに、報告書の原稿執筆を開始した。 |
| 12月～ | 原稿・版下が揃ったので報告書の割付・編集作業を行い、印刷業者を入札・選定し、契約事務を完了した。 |
| 1月～ | 遺物写真図版を作成し、印刷業者へ原稿及び版下を入稿した。 |
| 2月～ | 校正、及び出土遺物・記録類の整理を行った。 |
| 3月16日 | 3回の校正を経て、報告書を刊行した。 |
| 3月下旬 | 記録類、出土遺物等を整理して収納した。 |

(平山)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

上野平遺跡は下北半島南西端の牛ノ首岬から北東に約11km、むつ市役所川内庁舎から南西に6km程の地点に位置し、陸奥湾に注ぐ宿野部川右岸の段丘面上標高約9mに立地する。

遺跡の所在するむつ市川内町は、平成17年（2005）にむつ市に合併するまでは下北郡川内町であつた。大正6年（1917）年に町制施行する前は川内村で、これは明治22年（1889）に川内村・桧川村・蠣崎村・宿野部村が合併して出来たものである。遺跡が所在するのはこの旧宿野部村である。これらの村は、近世は盛岡藩の田名部通の西通に属していた。一方、北前船によって北海道・北陸・関西とも繋がっていた。上野平遺跡の北東約300mに所在する金七五三神社には、記録から明治以降に金沢から運ばれて来た事が分かる狛犬が残されているほか、宿野部には遠見番所も置かれていた^(II-1)。ちなみに、宿野部という地名はアイヌ語起源という説がある^(II-2)。

むつ市内には184の遺跡が登録されている。うち、旧川内町内に所在するものは44遺跡で、図1に本遺跡を含む旧川内町の33遺跡を示した。これらは陸奥湾に臨む海成段丘上に位置しているものが多い。この地域では、今まで発掘調査がほとんどなかつたため、各遺跡の詳細は明確ではないものの、弥生時代や中世の遺跡が注目されてきた。時代別にみると、旧石器時代では後期旧石器時代の彫器が採集されているものの、この時代の詳細は不明である（江坂1967・齋藤2004ほか）。縄文時代では早期前葉（日計式期）から遺跡が出現し、遺跡数は縄文時代前期に増加、中期に減少、後期に増加し晚期まで続く。弥生時代は遺跡数が比較的多いのが当地域の特徴である。奈良時代は当該期の遺跡がないため不明である。平安時代は掠文土器や製塙土器の出土が注目される。中世では蠣崎城跡・鞍越遺跡等が知られている。

上野平遺跡は、過去に資料紹介や発掘調査が複数回行われている。昭和48年（1973）に播鉢を被つた人骨が発見された（森本・橋1974）。次いで昭和51年（1976）に寺田徳徳氏が遺跡内で採取された掠文土器・土師器・繩文土器を資料紹介した（寺田1976）^(II-3)。また、同年に橋善光氏が発掘調査を行い、製塙カマド跡や礫群遺構を検出し、土師器・掠文土器・製塙・土製支脚・砥石・鉄製品が出土した（橋・奈良1977）。令和元年（2019）本事業に先立って実施された試掘調査では焼土遺構が検出され、範囲変更が行われた。

今回の調査区は国道338号線の北に隣接した幅23m・長さ70m程の長方形に、中央南が三角形状に突出した形をしている。標高は8.5m前後で、調査区内はほぼ平坦であるが、南西から北東にむかって緩やかな傾斜がある。現況は畑である。調査区の北西は、昭和51年に行われた調査範囲と重なる（第5章第2節参照）。なお、西通（蠣崎道）は調査区の北側を通っていたと考えられる^(II-4)。

（平山）

- (註1) 旧宿野部小学校前のグランド辺りと推定される（青森県教育委員会1986）。
- (註2) 菅江真澄は「めくら河といふ小河わたりて宿野部に來けり。こゝを、むかしは夷人の、スクノベツとかいひたる。」『於久野宇良く』と記している。シュブノッペ (shupun-ot-pe : ウグイ・多くいる・者 (川)) と推測される。同音の「宿野辺川」が北海道亀田郡七飯町にある。
- (註3) 「付近に寺院があり、その東側の地点から採集した」とある。本遺跡直近の寺院は遺跡の東に所在した旧地蔵院であるが、遺跡範囲外にあたるため本遺跡ではない可能性もある。
- (註4) 遺跡周辺での聞き取りや青森県教育委員会1986による。

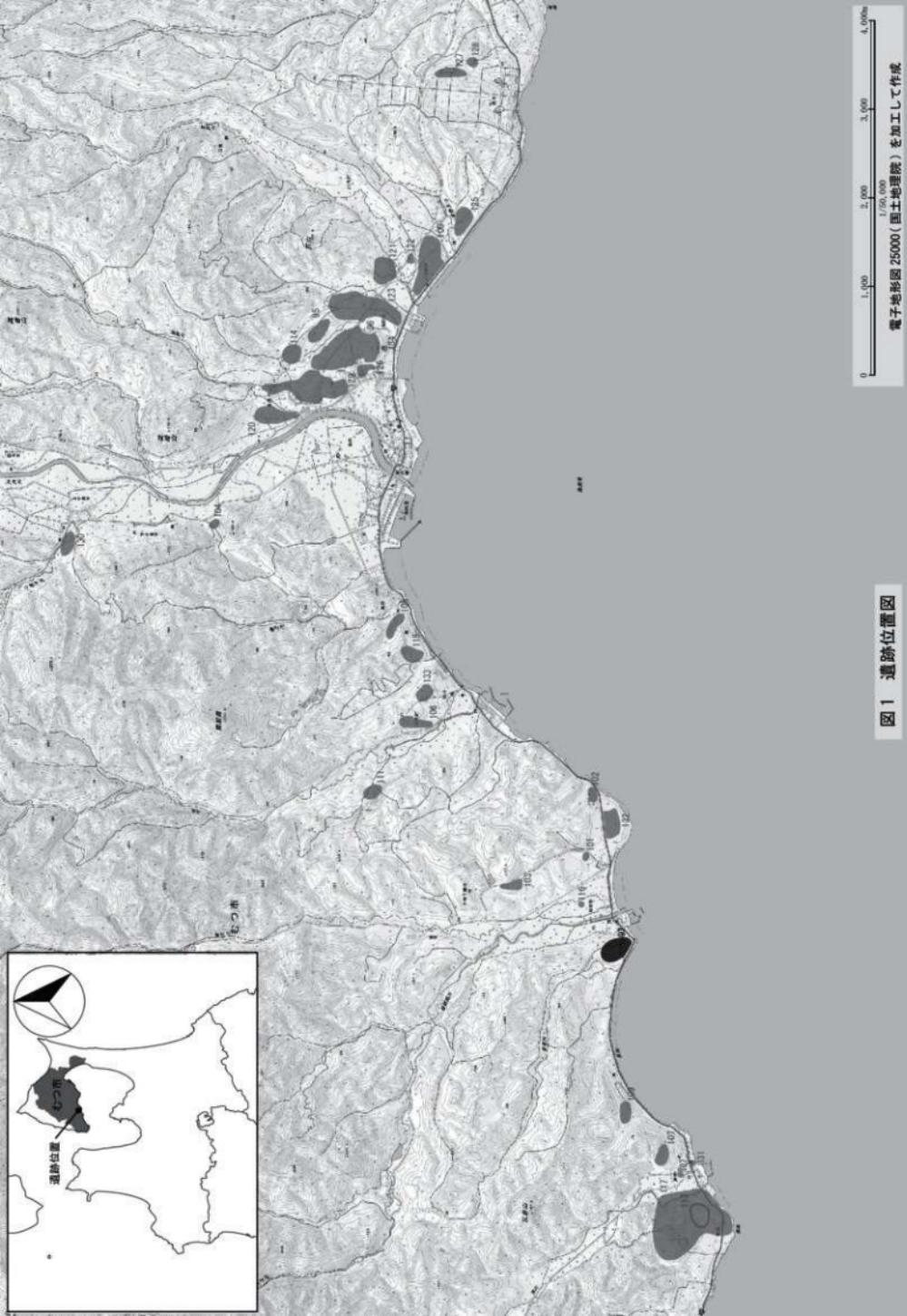
表1 上野平遺跡と周辺の遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	時代							種別	備考			
		古	早	前	中	後	晩	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世
208095	足里遺跡			○									散布地
208096	熊ヶ平(1)遺跡	○	○	○			●						散布地
208097	上野平遺跡	○	○						○	○			集落跡
208108	田野沢(1)遺跡			○				○	○	○			散布地
208101	船木平(1)遺跡			○				○	○	○			散布地
208102	船木平(2)遺跡			○				○					散布地
208103	上野平山遺跡			○				○					散布地
208104	駿七沢遺跡			○				○					散布地
208105	鶴沢遺跡			○				○					散布地
208106	松川現代遺跡	○	○	○	○								散布地
208107	斎崎平ノ前遺跡	○	○	○					○				散布地
208109	斎崎平山遺跡			○	○								散布地
208111	松川原遺跡	○	○	○				○					散布地
208113	斎崎合野遺跡	○	○	○				○					散布地
208114	高野川(1)遺跡												石器遺跡
208115	北馬糸遺跡					○							散布地
208116	不破須遺跡			○									散布地
208117	横崎古跡								○	○			城跡
208120	斎越遺跡	○	○	○	○	○	○		○	○			散布地
208121	高野川(2)遺跡	●	●	●	●	●	●						散布地
208122	右倉沢遺跡												散布地
208123	高野川(3)遺跡	●	●	●	●	●	●		○	●			散布地
208125	田野沢(2)遺跡												散布地
208126	熊ヶ平(2)遺跡				○				○				散布地
208127	猿川(2)遺跡												散布地
208128	猿川(3)遺跡												散布地
208129	板子坂遺跡	●	●	●	●	○							散布地
208130	釜谷遺跡			○									散布地
208131	斎崎古跡								○				生産遺跡
208132	船木平(3)遺跡				○					○			散布地
208133	松川遺跡				○								散布地
208134	熊ヶ平(3)遺跡				○	○			○				散布地
208137	香ノ木遺跡		○	○									散布地

●：青森県教育委員会が調査した遺跡で、調査結果から加筆した時代。

電子地形図 25000(国土地理院)を加工して作成

図1 遺跡位置図



第2節 上野平遺跡及び周辺の地形・地質について

弘前大学大学院理工学研究科 根本 直樹

1 上野平遺跡の位置と周辺の地形の概要

上野平遺跡は、むつ市川内町宿野部に位置する。地形的には、陸奥湾に面した海成段丘面に載る（図2）。標高は8～15mである。

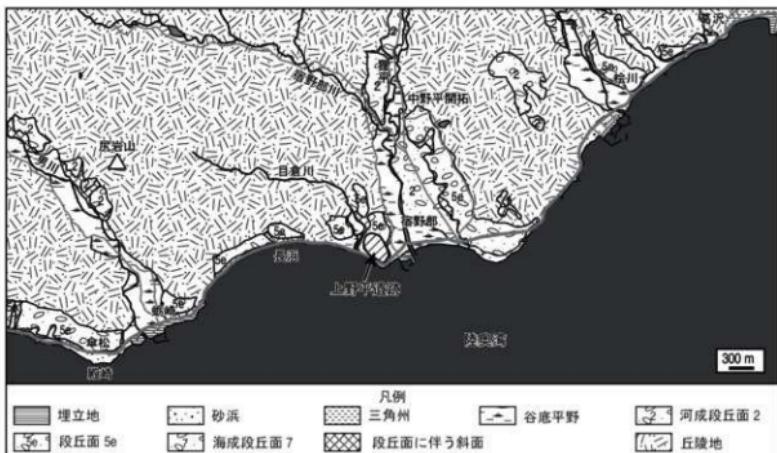


図2 上野平遺跡周辺の地形分類図

上野平遺跡周辺の地形を概観すると、陸奥湾沿いに海成段丘面が発達し、その背後に丘陵地が広がる。一方海成段丘面の前面には、砂浜または埋立地が分布する。また、主要河川に沿って、谷底平野が狭長に分布し、一部では河成段丘面を伴う。本稿では段丘面を上位から、海成段丘面7、段丘面5e、及び河成段丘面2に細分する。

丘陵地は、水野・堀田（1998）の脇野沢丘陵に相当する。上野平遺跡の北方に広がる。標高は300m以下で、大局的には南に向かって標高を減じる。起伏量は100～200 m/km²である。

海成段丘面7は、小池・町田（2001）のmT₇の一部に相当する。宿野部東方に小規模に分布する。標高は40～50mである。酸素同位体ステージ7（243,000～191,000年前；https://lorrainelisiecki.com/LR04_MISboundaries.txt, 2021年11月25日閲覧）に形成された。

段丘面5eは、水野・堀田（1998）の中位の下位面及び小池・町田（2001）のmT_{5e}及びFT_{5e}にほぼ相当する。海岸に沿って良く発達するほか、宿野部川下流左岸では宿野部から中野平開拓付近まで分布する。面の標高は10～40mで、海に向かってやや傾く。酸素同位体ステージ5e（約123,000年前；https://lorrainelisiecki.com/LR04_MISboundaries.txt, 2021年11月21日閲覧）に形成された海成

段丘面及びそれに連続する河成段丘面である。

河成段丘面2は、水野・堀田（1998）の低位面の一部、小池・町田（2001）のFT₂に相当する。男川、宿野部川、檜川やその支流に沿って断続的に分布する。段丘面の標高は海岸付近では5m程度であるが、上流域では60mを超える。最終氷期に形成された河成段丘面である。

段丘面に伴う斜面は、段丘面間の段丘崖、海食崖、及び段丘面を侵食した河谷の斜面を含む。段丘崖はその付け根の段丘面の形成時期に形成された。海食崖及び河谷の斜面は現在も形成過程にある。

谷底平野は、水野・堀田（1998）の谷底平野に相当する。男川、宿野部川、檜川などの主要河川に沿って狭長に分布する。

三角州は、水野・堀田（1998）の三角州に相当する。葛沢東方に見られる。

砂浜は、水野・堀田（1998）の砂浜に相当する。殿崎周辺、宿野部東方、檜川河口西方の海岸に狭長に分布する。

埋立地は、水野・堀田（1998）の埋立地に相当する。姫崎周辺の海岸、宿野部漁港、檜川漁港、川内漁港がこれに当たる。

上野平遺跡周辺の主要河川は、北西から南東へ流下する（図3）。下北半島西部の地質は、佐井村の長後から福浦にかけてを中心とする半ドーム構造をなす。本地域はその中心から南東方向に位置するため、北西→南東方向の流路が卓越すると解釈される。なお、丘陵地における水系は枝状水系で、丘陵地を形成する地質に顕著な定向性がないことを示唆する。段丘面上及び谷底平野の流路はまばらであり、水系は不明瞭である。

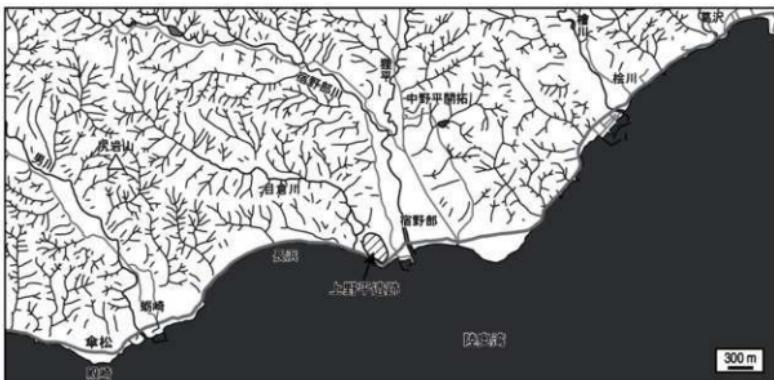


図3 上野平遺跡周辺の水系図

2 上野平遺跡周辺の地質

上野平遺跡北方の丘陵地には新第三系が広く分布する（図4）。それらはほぼ東西の走向をもち、南に緩傾斜する。下位より檜川層、小沢層、川内層、及び脇野沢安山岩類に区分される。また、川内層以下を貫くデイサイトの貫入岩が見られる。海岸沿いではこれらを段丘堆積物が覆い、主要河川と海岸には沖積層が分布する。

檜川層は、桑野（1958）により命名された。上村（1975）及び根本（1998）の檜川層、根本・鎌田（1999）の桧川層に相当する。層厚は500～730mである。宿野部川より西の丘陵地に分布する。主に流紋岩～ディサイト質火山岩類及びそれに伴う火砕岩から成る。火砕岩の殆どは緑淡緑色を呈する火山礫凝灰岩、凝灰角礫岩、軽石凝灰岩等である。凝灰質泥岩及び黒色の泥岩を挟む。 7.58 ± 0.18 Maの全岩K-Ar年代が得られている（資源エネルギー庁、1995）。

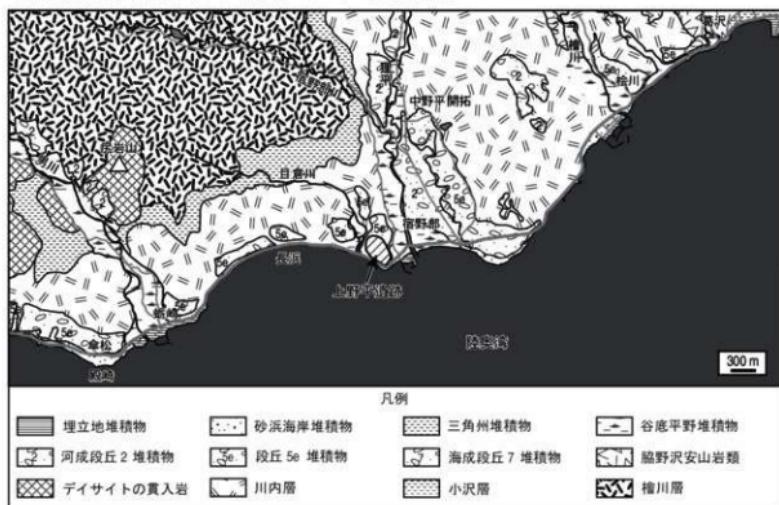


図4 上野平遺跡周辺の地質図

小沢層は、北村ほか（1959）により命名された。上村（1975）、根本（1998）、根本・鎌田（1999）の小沢層に相当する。宿野部川より西の丘陵地で、桧川層を囲むように分布する。層厚は約150mである。黒色の泥岩を主体とし、珪質で硬質な物と軟質な物が互層を成す。東方に向かって次第にシルト岩となり、目倉川流域では軽石凝灰岩を挟む。檜川層を整合に覆うが、一部では檜川層最上部と指交する。

川内層は、金属鉱物探鉱促進事業団（1969）により命名された。上村（1975）、根本（1998）、根本・鎌田（1999）の川内層に相当する。上野平遺跡周辺の丘陵地に広く分布する。ディサイト質の火砕岩を主体とし、礫岩、砂岩、シルト岩を挟む。下位の小沢層とは整合・一部不整合の関係にある。

脇野沢安山岩類の名称は、北村ほか（1959）の脇野沢安山岩質集塊岩に由来する。上村（1975）、根本（1998）、根本・鎌田（1999）の脇野沢安山岩類に相当する。葛沢周辺に小規模に分布する。層厚は500mを超える。ディサイト～安山岩質火山角礫岩、凝灰角礫岩及び火山礫凝灰岩を主体とし、安山岩溶岩、凝灰質砂岩、シルト岩等を挟む。資源エネルギー庁（1995）により 8.41 ± 1.01 Maの全岩K-Ar年代が報告されている。小沢層を整合に覆う。

ディサイトの貫入岩は、尻岩山周辺の男川流域に見られ、檜川層及び小沢層を貫く。灰白色を呈し、

斜長石、石英、黒雲母、角閃石の斑晶が認められる。

以下に、段丘堆積物及び沖積層について記述する。それらの分布は対応する地形の分布に等しいので、記述を省略する。沖積層は、谷底平野堆積物、三角州堆積物、及び砂浜海岸堆積物から構成される。

海成段丘7堆積物は、根本・鎌田（1999）の宿野部段丘堆積物の一部に相当する。下部は風化が進んだ礫層で構成され、それを厚さ2m以上の風成層が覆う。

段丘5e堆積物は、根本・鎌田（1999）の川内段丘堆積物にほぼ相当する。下部は主に安山岩の亜円礫から成る礫層から構成され、それを明黄灰色を呈する粘土層及び赤褐色の風成層が覆う。厚さは5m以下である。

河成段丘2堆積物は、根本・鎌田（1999）の永下段丘堆積物にほぼ相当する。礫層及び砂質粘土層から成る。礫は新第三系の火碎岩に由来する中亜円礫である。厚さは数mである。樹木片を含むことがある。

谷底平野堆積物は、根本・鎌田（1999）の沖積低地堆積物の一部に相当する。砂層、礫層、及び泥層から成る。

三角州堆積物は、根本・鎌田（1999）の沖積低地堆積物の一部に相当する。砂層及び泥層から成る。

砂浜海岸堆積物は、主に淘汰の良い砂から構成される。泥層や細礫層を挟むことがある。

埋立地堆積物は、人為的に搬入された土砂から構成される。

引用文献

- 金属鉱物探鉱促進事業団 1969 『昭和43年度広域調査報告書「下北地域」』通商産業省 24p.
- 資源エネルギー庁 1995 『平成6年度広域地質構造調査報告 渡島大島・下北地域』資源エネルギー庁 107p.
- 上村不二雄 1975 『5万万分の1地質図幅及び説明書「陸奥川内」』地質調査所 39+7p.
- 小池一之・町田 洋編 2001 『日本の海成段丘アトラス』東京大学出版会 122p.
- 北村 信・鈴木養身・多田元彦 1959 『下北半島西部の地質』青森県商工課 p.1-11.
- 桑野幸夫 1958 「下北半島北部の地質」『資源科学研究所彙報』no.46-47 p.28-37.
- 水野 裕・堀田報誠 1999 「地形分類図」『土地分類基本調査「陸奥川内・脇野沢」』青森県農林部 農村計画土課 p.11-16.
- 根本直樹 1998 「下北地域」『青森県の地質』青森県観光労働部鉱政保安課 p.60-67.
- 根本直樹・鎌田耕太郎 1999 「表層地質図」『土地分類基本調査「陸奥川内・脇野沢」』青森県農林部 農村計画土課 p.17-39.

第3節 上野平遺跡の基本土層

基本土層は7層に分層した。層序の残りが良い調査区北西で実測図を示し、作図地点は遺構配置図に記した。調査時の所見について説明する。

第I層 10YR3/2 黒褐色土

表土。畑の耕作土で、草木根が発達し、しまりなく柔らかい。層厚は20~30cmである。地表近くの草木根が厚い部分に関しては、第I a層と細分した箇所もある。

第II層 10YR1.7/1 黒色土

縄文時代~古代の遺物包含層。草木根やしまりややあり。層厚は20~30cmである。ほとんどどの遺構は第I層除去後の本層上面で検出した。昭和51年調査で遺物や遺構が検出された第I層下部に相当すると考えられる。

第III層 10YR2/1~10YR4/3 黒色~にぶい黄褐色土

漸移層。10YR5/6 黄褐色輕石（ ϕ 1~7mm）が2%混入する。しまりあり。層厚は30~40cmである。層上位の色調は黒色が強く、層下位は黄褐色が強い。昭和51年調査の第II層に相当すると考えられる。第1号竪穴建物跡は本層上面で検出したが、断面観察で第II層から掘り込んでいた。

第IV層 10YR5/6 黄褐色ローム

酸化鉄粒（ ϕ 2~10mm）が1%混入する。粘性は強い。第V層とは不整合である。昭和51年調査の第III層に相当すると考えられる。

第V a層 10YR7/6 明褐褐色ローム

酸化鉄粒（ ϕ 2~10mm）が1%、マンガン粒（ ϕ ~1mm）が1%未満混入する。粘性あり。第V b層とは漸移的で、層下部ほど色調が白く、かつ、粘性が弱くなる。

第V b層 10YR7/6 ~ 10YR8/4 明褐褐色~浅黄橙色ローム

酸化鉄粒（ ϕ 10mm前後）が1%、マンガン粒（ ϕ ~1mm）が1%未満混入する。粘性あり。層下部ほど色調が白く、粘性が強まる。酸化鉄粒は層下部に目立ち、一部は層状である。酸化鉄粒は草根痕跡の可能性がある。

第VI層 10YR8/3~10YR7/8 浅黄橙色~黄橙色砂

段丘5e堆積物の上部に相当する層と思われる。酸化鉄を挟み、層上部の浅黄橙色砂と層下部の黄橙色砂が不整合に重なる。ともにラミナが水平に観察される。

(平山)

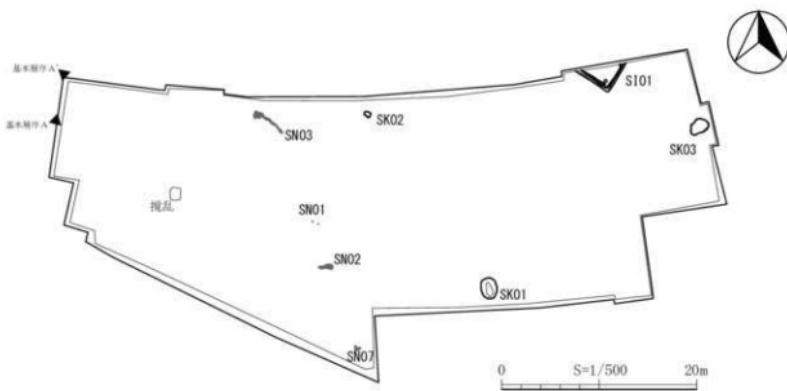
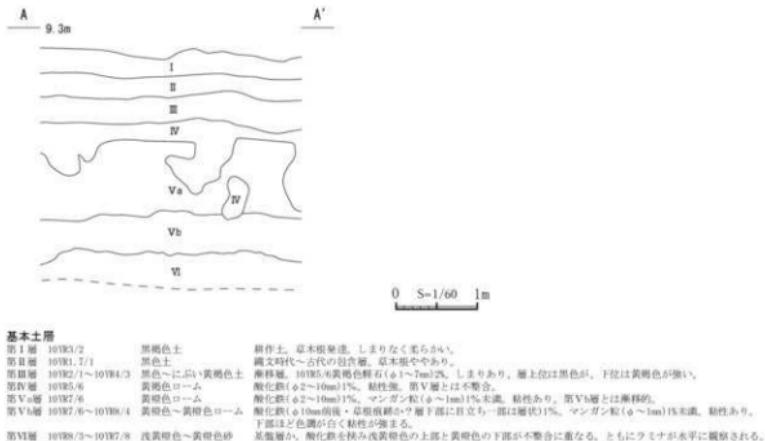


図5 基本土層図

Y=8,200

X=13,0400

X=13,0300

Y=8,100



調査区域

No. 6

No. 5

No. 4

No. 3

陸奥湾

0
50m
1/1,000

図6 路線図・調査区域図

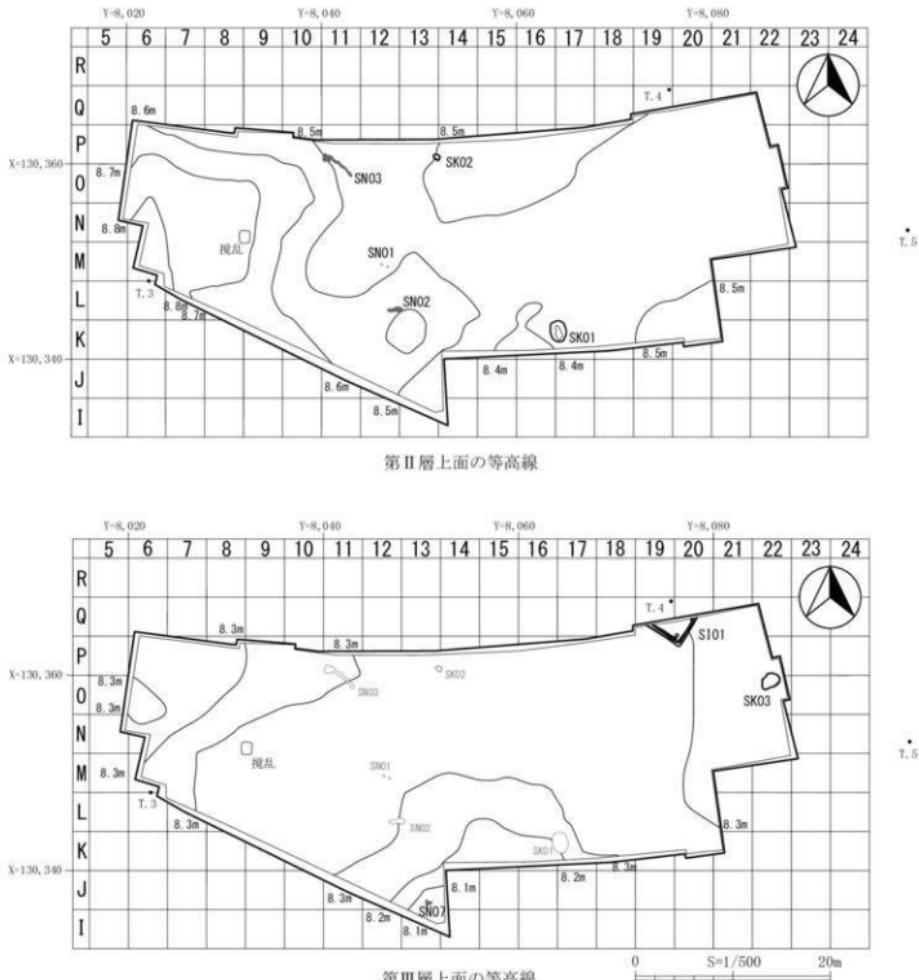


図7 遺構配置図

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 概要

調査区は国道338号線の北に隣接した幅23m・長さ70m程の長方形に、中央南が三角形状に突出した形をしている。標高は8.5m前後で、調査区内はほぼ平坦であるが、南西から北東にむかって緩やかな傾斜がある。現況は畑である。調査区の北西は昭和51年に行われた調査範囲と重なる（第5章第2節参照）。

今回の調査では平安時代の竪穴建物跡1棟と土坑1基、平安時代以降の土坑2基・焼土遺構4基を確認し、遺物は縄文時代・平安時代・近世の土器・石器・土製品・鉄生産関連遺物等が段ボール箱で4箱分出土した。遺構は調査区中央もしくは東端で検出した。遺物は調査区北西部から出土したものが多い。これは昭和51年調査区の埋戻し土に混入していたものである。

以下、遺構と遺物について個別に記述する。

第2節 検出遺構と出土遺物

1 竪穴建物跡（図8～10、写真4～6・12）

調査区北東端から1棟検出した。建物跡の北側約半分程度が調査区域外にあるため、建物跡全体の輪郭は不明である。調査着手時は1棟の竪穴建物跡として認識していたが、当初検出した建物跡のプランの内側に、焼土や炭化物を直線状に検出したことや土層断面観察等から、本建物跡は造り替えられていることが判明し、新期をSI01（新）、古期をSI01（旧）とした。検出範囲では、SI01（新）の規模はSI01（旧）より小さく、SI01（旧）の中に入子状に構築している。

第1号竪穴建物跡（新）（SI01（新））（図8・9、写真4～6・12）

【位置・確認】調査区北東端のP・Q-19・20グリッドに位置する。

【平面形・規模】建物跡の北側約半分程度が調査区域外にあるが、平面形は長辺3.2m以上・短辺約2.7mの長方形をなすものと推定される。壁長は南西壁で（3.2）m、南東壁で2.7mを測る。確認面から床面までの深さは南西壁で31cm、南東壁で26cmである。南東壁はほぼ垂直に、南西壁・北東壁は外傾しながら立ち上がる。建物跡の軸方位は、カマドが北東壁にあるとすればN-36°E、北西壁にあるとすればN-56°W前後と推定される。

【床面・壁面】検出範囲では、床面は全面に掘方を有し、床を貼って平坦に整えている。南隅から建物跡中央にかけて硬化範囲が認められた。壁構は南西壁と北東壁で確認でき、南西壁では幅24cm、深さ17～31cm、北東壁では幅12cm、深さ16～19cmである。

【堆積土】黒褐色土主体で6層に分層した。第5層は壁構・第6層は掘方埋土である。床面直上の第4層は焼土・炭化物が多量に混入する。人為的に埋め戻されたものと思われる。

【カマド】検出した建物範囲内には確認できなかった。調査区外に延びる竪穴建物跡北東壁もしくは北西壁に作られているものと推定される。

【柱穴】南隅から1基検出した。主柱穴と考えられる。径33cmの円形で、床面からの深さは16cmを測る。堆積土は暗褐色土の単層でしまりがないため、柱は抜き取られたものと推測される。

【出土遺物】土師器、石器、鉄生産関連遺物が主に床面から出土した。土師器は2,375.8 g 出土し、うち9点(2,206.7g)図示した。1・2は壊である。1はロクロ形成の壊である。復元図示しなかつたが、口径は11.2cmと推定される。器壁も薄く、小振りである。2は建物跡南隅から出土した。内面が黒色処理され、内面には斑状に・外面には帯状に炭化物が付着している。付着炭化物について、放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体を行ったところ（第4章第2節参照、土器内面：PLD-45895・試料No.1 / 土器外側：PLD-45896・試料No.2）、5世紀前葉～6世紀末葉の年代と、C₃植物に近いもしく草食動物とC₄植物との分析結果が得られた。3～9は甕である。3は口縁部～胴部、4・5は口縁部、6～8は胴部、9は底部である。器面調整は、外面はケズリ・内面はナデが卓越する。3は建物跡東隅付近から出土した。底面以外ほぼ復元できた。底部に向かって急激にぼよまる器形である。口縁部の内外面に煤の付着が、内面に被熱痕跡が認められる。8はロクロ形成のものである。9の外底面はケズリ調整である。4は顕著に被熱しており、製塙土器の可能性がある。石器は砥石が1点(16.9g)出土した(10)。礫面の1面を使用面としたもので、石材は凝灰岩である。鉄生産関連遺物は4点(134.7g)出土した。11は板状の鉄製品・12・13は鉄滓、14は羽口溶解物と思われる。12の表面は赤褐色を呈し、上面は比較的平坦で、下面は半球状を呈する。内面は全体に密で重みがある。碗形滓である。13の表面は赤褐色と灰白色が混在し、上面は比較的平坦で、断面は半円状を呈する。全体に密で重みがある。炉内流動滓と思われる。その他カマドの芯材と思われる被熱礫が9点(2,155.6g)出土した。一部を写真12に掲載した。石材は、石英が重量比で68.54% (1,477.5g)、珪質頁岩18.03% (388.7g)、デイサイト11.00% (237.1g)、凝灰岩2.43% (52.3g) である。カマド構築材と思われる焼成粘土が237.1g出土した。床面からは焼土・炭化物が多量に出土している。焼土は建物跡南隅から南西壁の壁溝に沿って5～20cm程の幅の帯状の広がりで確認できた。また、長さ5～10cm、幅5cm程の板状の炭化物が同様の範囲に散在していた。

【小結】 遺構の形態、遺構の重複関係、出土遺物などから、平安時代の遺構である。火災により倒壊した焼失建物跡と判断されるが、火災が建物の廃棄を意図したものかは不明である。本建物跡床面から出土した壊(2)付着炭化物の分析結果からは、出土土器から想定される時期よりもかなり古い年代が得られたが、海産物の影響は受けていないことから、火災の際に土器に付着した建築部材による古木効果の可能性がある。10世紀中葉以降に構築された建物跡と考えられる。

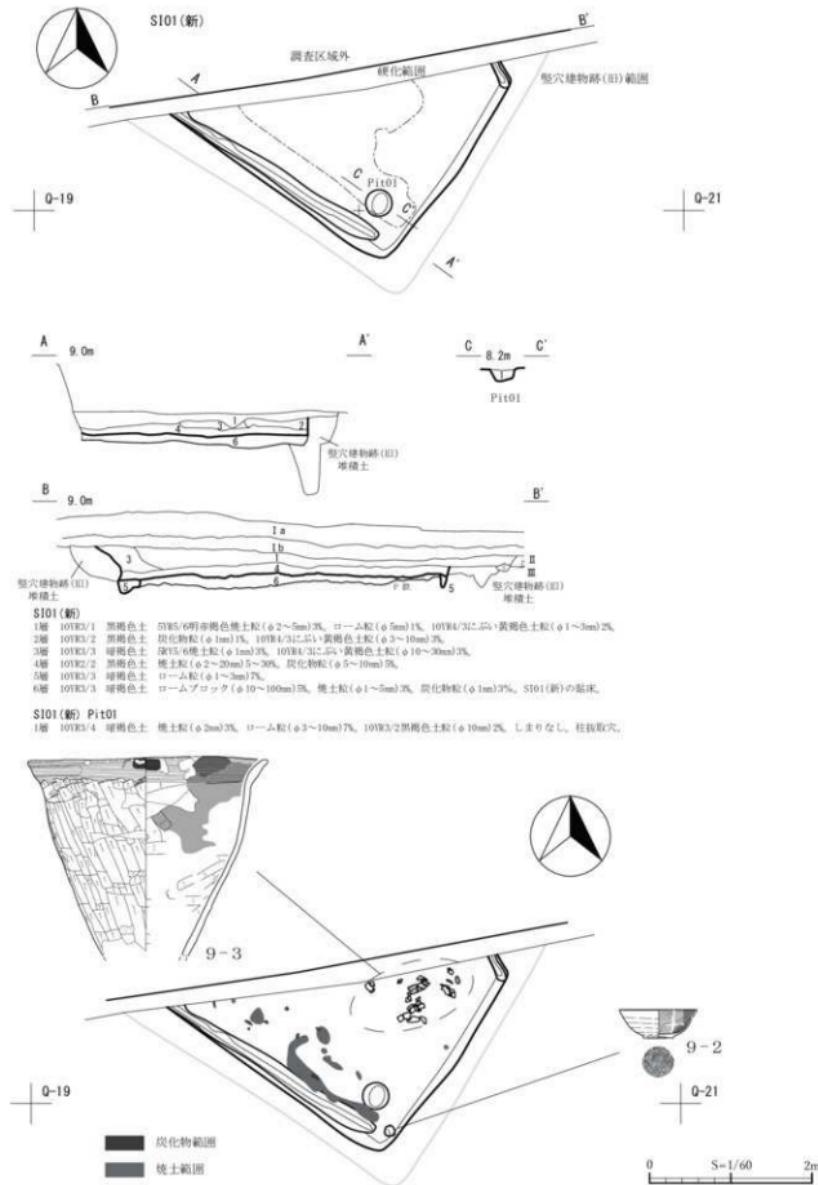


図8 第1号堅穴建物跡(新)(1)

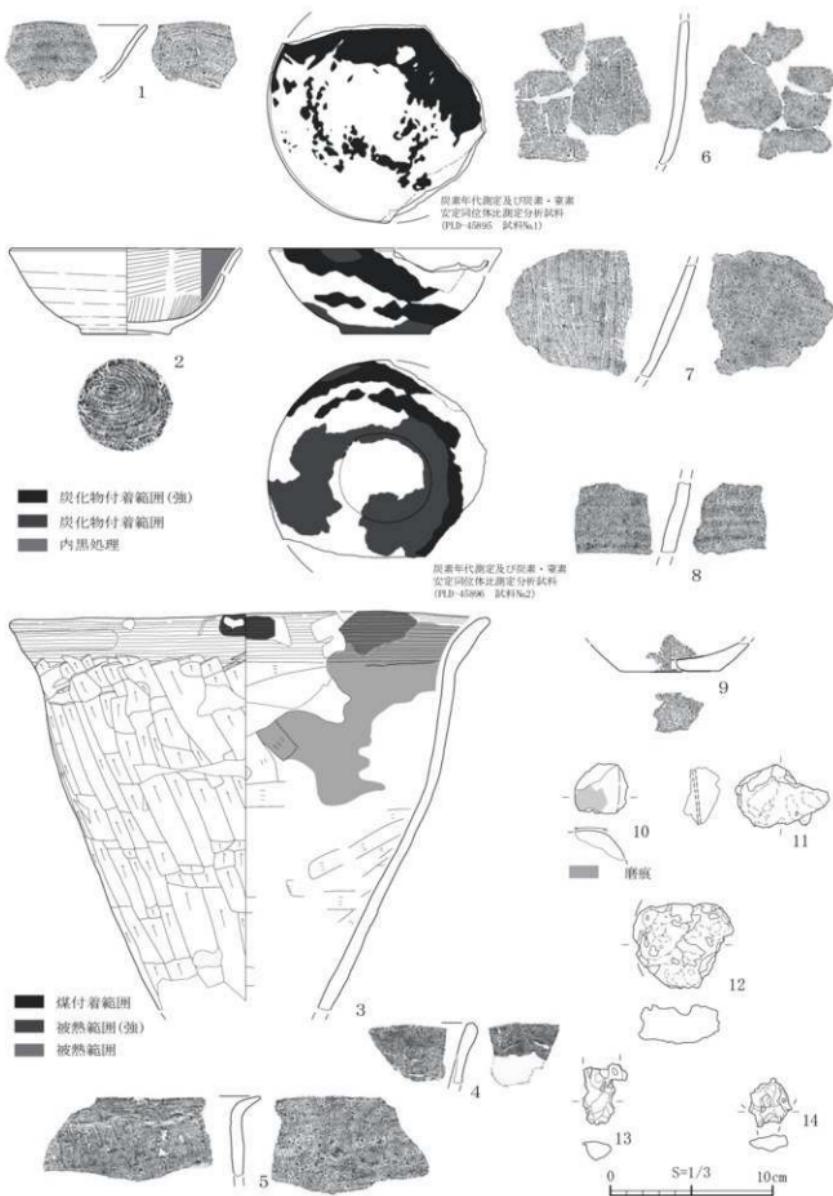


图9 第1号竪穴建物跡(新)(2)

第1号竪穴建物跡（旧）（SI01（古））（図10、写真6・12）

【位置・確認】調査区北東端のP・Q-19・20グリッドに位置する。第III層で検出したが、調査区壁面の土層観察から、第II層を掘り込んで構築していることが判明した。前述のとおり調査着手時当初は1棟の竪穴建物跡として認識していたが、造り替えられていることが判明し、古期の本建物跡をSI01（旧）とした。

【平面形・規模】建物跡の北側約半分程度が調査区域外にあるが、平面形は一辺4m以上の方形をなすものと推定される。壁長及び確認面から床面までの深さは、南西壁（4.0）m・深さ51cm、南東壁（3.5）m・深さ54cmを測る。いずれの壁も外傾しながら立ち上がる。建物跡の軸方位は、カマドが北東壁にあるとすればN-32°-E、北西壁にあるとすればN-57°-W前後と推定される。

【床面・壁面】第IV層を床面にし、凹凸が見られる。検出した建物範囲内には貼床や硬化範囲は確認できなかった。壁溝（SD01）は南東壁で確認できた。幅24cm、深さ12～30cmである。

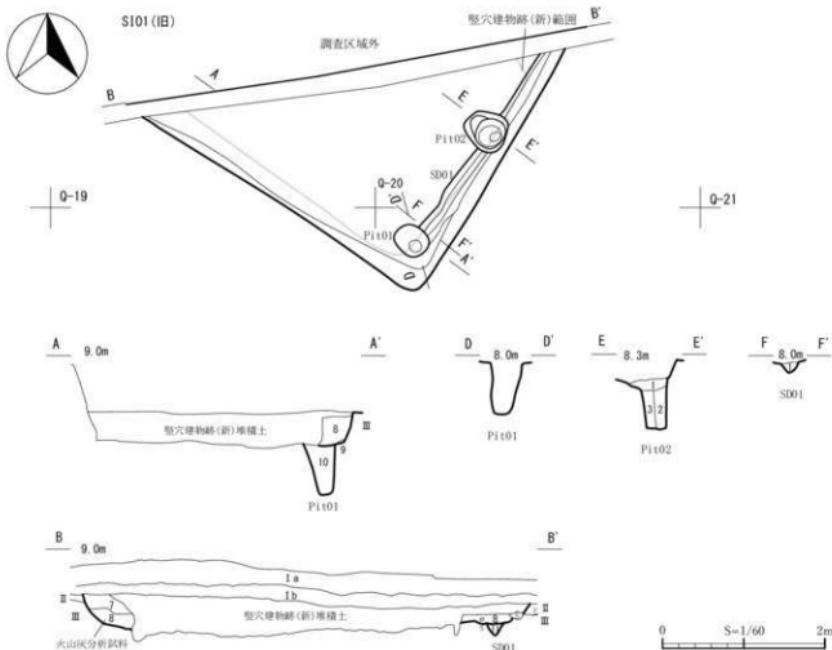
【堆積土】暗褐色土主体で5層に分層した。第1号竪穴建物跡（新）と連続して層序番号を付したため、本建物跡に係る層序番号は第8～11層である。第10層はPit01・第11層は壁溝の堆積土である。ローム粒・ロームブロックの混入度合いが高く、人為的に埋め戻されたものと思われる。第8層に混入するにぶい黄褐色土を火山灰と推測し分析を行ったところ、十和田八戸テフラに由来する可能性が指摘された（第4章第1節参照、火山灰2）。

【カマド】検出した建物範囲内には確認できなかった。調査区外に延びる竪穴建物跡北東壁もしくは北西壁に作られているものと推定される。

【柱穴】南隅と南東壁際から2基検出した。主柱穴と考えられる。南隅のPit01は44×37cmの楕円状で、床面からの深さは63cmを測る。堆積土は暗褐色土の単層でしまりがないため、柱は抜き取られたものと推測される。南東壁際のPit02は55×50cmの楕円状で、床面からの深さは63cmを測る。堆積土は3層に分層した。第2層はしまりがなく、柱痕跡と考えられる。第1層は硬くしまっており、柱は切取られたものと推測される。

【出土遺物】土師器が81.1g出土し、うち3点（72.3g）図示した。全て甌である。1は口縁部、2・3は胴部である。いずれも外面はケズリ調整・内面はナデ調整である。1・3は壁溝から出土したもの、2は第8層と第1層が接合したものである。1は器表面に顕著な被熱痕跡が認められる。その他カマドの芯材と思われる被熱礫が4点3,560.6g出土した。石材は、凝灰岩が重量比で99.87%（3,556.1g）、石英0.13%（4.5g）である。

【小結】遺構の形態、遺構の重複関係、出土遺物などから、平安時代の遺構である。堆積土の状況は人為的に埋め戻されたものとみられ、10世紀中葉以降に構築・廃棄された建物跡と考えられる。



S101(旧)	
7番	10TR3/2 黒褐色土
8番	10TR3/4 黒褐色土
9番	10TR3/3 黒褐色土
10番	10TR3/4 黒褐色土
11番	10TR3/3 黒褐色土

○—ム粒 ($\phi 1\sim3mm$) 2%、
△—ム粒 ($\phi 1\sim20mm$) 20%、10TR4/3に5%、黄褐色土粒 ($\phi 3\sim10mm$) 5%、
□—ム粒 ($\phi 1\sim2mm$) 20%、
×—ムブロック ($\phi 10\sim50mm$) 40%、Pit01堆積土。
△—ム粒 ($\phi 1\sim3mm$) 1%、□—ム粒 ($\phi 1\sim3mm$) 5%、SD01堆積土。

S101(旧) Pit01
1番 10TR3/4 黒褐色土 ロームブロック ($\phi 30\sim50mm$) 30%、しまりなし。柱抜取穴。

S101(旧) Pit02
1番 10TR3/4 黒褐色土 ロームブロック ($\phi 10\sim30mm$) 20%、粘土を含んだ壤土。硬くしめる。柱切跡。
2番 10TR3/2 黒褐色土 しまりなし。柱痕跡。
3番 10TR5/6 黄褐色土 10TR2/2黒褐色土ブロック 5%、非常に硬い。柱痕。

S101(旧) SD01
1番 10TR3/3 黒褐色土 桃土粒 ($\phi 1mm$) 1%、ローム粒 ($\phi 1\sim3mm$) 5%。

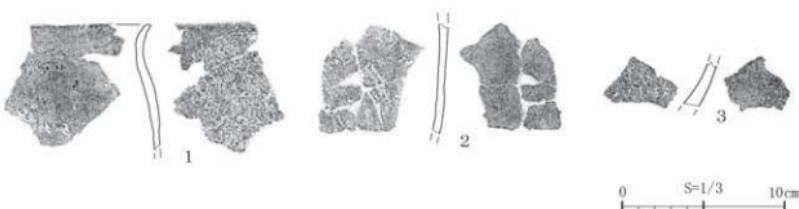


図10 第1号竪穴建物跡(旧)

2 土坑（図11、写真7・12）

土坑は3基検出した。調査区の縁辺に位置し、平面形は橢円形である。遺物の出土は第1号土坑以外はなかったため詳細な時期は不明であるが、検出層位等から平安時代もしくはそれ以降の可能性がある。

第1号土坑（SK01）（図11、写真7・12）

【位置・確認】調査区中央南端のK-16・17グリッドで、第I層除去後の第II層上面で火山灰の広がりと黒褐～暗褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】無し。

【規模・平面形・壁面】長軸216cm・短軸166cmの橢円形を呈する。深さは81cmである。壁は底面から内湾して立ち上がり、半円状の断面形状をしている。

【堆積土】黒～暗褐色土主体で8層に分層した。第1層中には白頭山一苦小牧火山灰（第4章第1節参照）の混入が認められる。火山灰は土坑の南側に偏在し、長軸107cm・短軸89cmの円状の範囲で確認されたが、中心部が薄い検出状況であった。土層断面でも第1層の下部に帯状に堆積していることから、火山灰は第2層まで埋没した土坑の窪地に流入したものと考えられる。第1・2層中には炭化物粒が、第5～8層中にはロームブロックが混入しており、第2層以下は人為堆積と推定される。

【出土遺物】第1層中から土師器の甕が61.5g出土し、うち1点（56.0g）を図示した（11-1）。火山灰層の上からの出土である。

【まとめ】白頭山一苦小牧火山灰降下以前に構築・廃絶・埋没していたと推定される。

第2号土坑（SK02）（図11、写真7）

【位置・確認】調査区中央北端のP-13・14で、第I層除去後の第II層上面で検出した。

【重複】無し。

【規模・平面形・壁面】長軸71cm・短軸53cmの橢円形を呈する。深さは22cmである。壁は底面からやや内湾気味に立ち上がり、箱状の断面形状をしている。

【堆積土】2層に分層した。第1層は黒色土層で堅緻である。第2層は暗褐色土で、橙色粒が混入し、湿性に富む。人為堆積と推定される。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【まとめ】時期を示す遺物は出土しなかったが、検出層位から平安時代以降と考える。

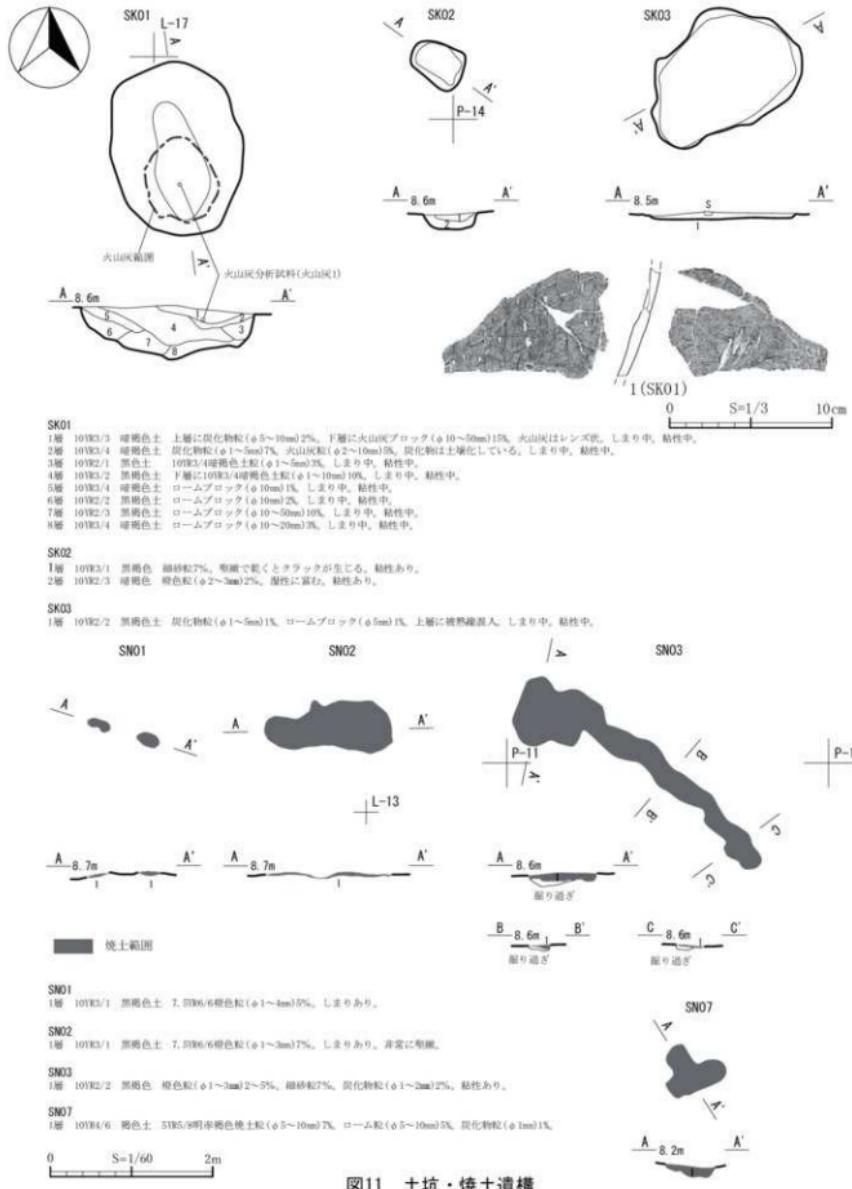
第3号土坑（SK03）（図11、写真7）

【位置・確認】調査区東端の0・P-22グリッドで、第III層上面で検出した。

【重複】無し。

【規模・平面形・壁面】長軸206cm・短軸149cmの橢円形を呈する。深さは10cmである。底面はほぼ平坦で、壁は底面から外傾して立ち上がり、皿状の断面形状をしている。

【堆積土】黒褐色土の単層で、炭化物粒・ロームブロックが混入している。また、被熱礫が1点混入していた。人為堆積と推定される。



【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【まとめ】時期を示す遺物は出土しなかったが、検出層位から平安時代以降と推定される。

3 焼土遺構（図11、写真8・9）

焼土遺構は当初7基検出したが、第4～6号焼土遺構と命名したものは第II～III層中に下位の第IV層以下のロームが集積したものであると判断し、欠番とした。それぞれに伴って出土した遺物は無いため詳細な時期は不明であるが、検出層位等から平安時代もしくはそれ以降の可能性がある。

第1号焼土遺構（SN01）（図11、写真8）

【位置・確認】調査区中央のM-12グリッドで、第I層除去後の第II層上面で検出した。試掘調査で確認されたものである。

【重複】無し。

【規模・平面形】小規模な楕円状の焼土範囲が東西に2つ並ぶ。西側のものは長軸30cm・短軸14cm、東側のものは長軸29cm・短軸17cmで、焼土の厚さは西側が3cm、東側は6cmである。黒褐色主体で、橙色粒が混入する。しまりはあるが、被熱は顕著ではない。

【出土遺物】無し。

【まとめ】時期を示す遺物は出土しなかったが、検出層位から平安時代以降と考える。

第2号焼土遺構（SN02）（図11、写真9）

【位置・確認】調査区中央のL-12・13グリッドで、第I層除去後の第II層上面で検出した。

【重複】無し。

【規模・平面形】長軸160cm・短軸65cmの楕円形を呈する。焼土厚は5cmである。黒褐色主体で、橙色粒が混入する。しまりがあり、非常に堅緻であるが、被熱は顕著ではない。

【出土遺物】無し。

【まとめ】時期を示す遺物は出土しなかったが、検出層位から平安時代以降と考える。

第3号焼土遺構（SN03）（図11、写真9）

【位置・確認】調査区中央北寄りのO・P-11グリッドで、第I層除去後の第II層上面で検出した。

【重複】無し。

【規模・平面形】径90cmの不整円と幅約37cm・長さ約280cmの溝状に延びる焼土が結合したオタマジャクシに似た平面をしている。長軸368cm・短軸90cmである。焼土厚は北西の不整円で10cm・南東の溝で2cmである。黒色主体で、橙色粒・細粒砂・炭化物粒が混入する。被熱は顕著ではない。

【出土遺物】無し。

【まとめ】時期を示す遺物は出土しなかったが、検出層位から平安時代以降と考える。

第7号焼土遺構（SN07）（図11、写真9）

【位置・確認】調査区中央南端のJ-13グリッドにおいて、第III層上面で検出した。

【重複】無し。

【規模・平面形】長軸78cm・短軸64cmの楕円形を呈する。焼土厚は13cmである。褐色主体で、明赤褐色焼土粒、ローム粒、炭化物粒が混入する。被熱は顕著ではない。

【出土遺物】無し。

【まとめ】時期を示す遺物は出土しなかったが、検出層位から平安時代以降と推定される。

第3節 遺構外出土遺物

遺物は調査区のほぼ全域から散発的に出土した。調査区北西部から出土したものが多いが、これは昭和51年調査区の埋戻し土に混入していたものである。

1 繩文時代

(1) 土器 (図12-1～3、写真13)

遺構外からは総数で3点 (48.6g) の縄文土器が出土した。極めて少ない。全て図示した。1・2は胎土中に纖維が混入していることから、縄文時代前期と推定されるが、器面の摩耗が激しく土器型式等の比定はできない。1は器面に多軸縦条体と推定される縄文が施されている。3は口唇部にR Lが施文されるものであるが、小片のため時期不明である。

(2) 石器 (図12-4～図13-4、写真13)

遺構外からは総数で31点 (1,698.5g) の石器が出土した。剥片石器が30点 (1,690.5g)、礫石器1点 (8.0g) である。石材は、珪質頁岩が重量比で98.50%を占め (29点・1,673.0g)、緑色凝灰岩1.50% (2点・25.5g) となっている。器種は、石鎌 (重量比0.14% : 1点・2.4g)、石匙 (0.79% : 1点・13.5g)、スクレイバー (4.65% : 2点・78.9g)、二次加工のある剥片 (0.52% : 1点・8.9g)、微細剥離のある剥片 (8.93% : 5点・151.6g)、石核 (65.68% : 3点・1,115.6g)、剥片 (18.82% : 17点・319.6g)、磨製石斧 (0.47% : 1点・8.0g) が出土している。特定の石材・器種に偏る傾向が認められる。

以下、器種ごとに述べる。

石鎌 (図12-4、写真13)

有茎平基のものが1点 (2.4g) 出土した。両側縁がやや直線的な二等辺三角形状のものである。

石匙 (図12-5、写真13)

縦形のものが1点 (13.5g) 出土した。表面の器面調整は正面中央に及び、裏面の調整は摘み部に集中する。厚さは9mm、断面形は半円状である。

スクレイバー (図12-6・7、写真13)

2点 (78.9g) 出土した。素材剥片の縁辺に連続する刃部加工が施されたものである。刃部加工はともに2側縁に施され、加工は急角度で施されている。6は剥離方向が片面であるが、正面右側縁・

裏面左側縁は交互に刃部加工が施されている。7も剥離方向が片面であるが、正面左側縁・裏面右側縁は一部両面加工である。石材は6が珪質頁岩、7が緑色凝灰岩である。

二次加工のある剥片（図12-8、写真13）

1点（8.9g）出土した。表皮が残る剥片を素材とし、正面の側縁下端に片面から刃部調整とは異なる粗い加工がなされたものである。

微細剥離のある剥片（図12-9～13、写真13）

5点（151.6g）出土し、全てを図示した。素材剥片の縁辺に微細な剥離痕が認められるもので、剥離痕は素材剥片の1側縁から2側縁にみられる。剥離方向は全て片面である。9～11は2側縁に微細剥離が認められるものである。9は正面・裏面の左側縁に微細剥離が認められる。10・11は両側縁に部分的に認められる。12・13は1側縁に微細剥離が認められるものである。これも側縁の一部に部分的に認められる。9～11・13は表皮が残る素材を利用している。

石核（図13-1～3、写真13）

3点（1,115.6g）出土した。素材となる礫や剥片の打面を転移しながら剥片を作出している。1は今回確認されたもので最も大きなもので、8点が接合したものである。正面に長さ約8cm、幅9cmの剥片をとった痕跡が認められる。2は2点が接合したものである。上面の礫面を打面として剥片作出を行い、下面や側面からも剥離が試みられるものの、上面ほどの大きな剥離はみられない。3は1・2より小振りなもので、表面では上面の端部、裏面では上面の中央から剥片を作り出している。

剥片

17点（319.6g）出土したが図示しなかった。石材は珪質頁岩である。

磨製石斧（図13-4、写真13）

1点（8.0g）出土した。刃部片で、表裏面を研磨している。石材は緑色凝灰岩である。

2 平安時代

平安時代の遺物は、土師器・須恵器・掠文土器・土製支脚・砥石・鉄滓が出土した。

（1）土師器（図14-1～8、写真14）

土師器は539.9g出土し、うち8点（259.0g）を図示した。全て甕である。1・2は口縁部、3～5は胴部、6～8は底部である。調整は、外面がケズリ・内面はナデで、底部はナデ調整のもの（6・7）とケズリ調整のもの（8）とがある。全体に被熱し、1・8は特に顕著である。1は製塩土器の可能性がある。小片であるため詳細な時期は不明であるが、後述する須恵器の存在から勘案し、10世紀中葉以降と推測される。

(2) 須恵器 (図14-9、写真14)

須恵器は1点 (20.4 g) 出土した。甕の胴部片で、外面はタタキ、内面にはナデが見られる。五所川原産と推測され、10世紀中葉の時期が推定される。

(3) 擦文土器 (図14-10~14、写真14)

擦文土器は5点 (47.0 g) 出土し、全てを図示した。全て甕で、外面にハケメ、内面にミガキが施されたものである。10・11は口縁部、12~14は胴部である。口縁部は外面と口唇部に沈線が施されたもので、11の外面には小口状の工具によると思われる刺突が矢羽状に施されている。12・13は貼付開縫帶が施された胴部片で、貼付開縫帶の上面には馬蹄形文が施されたものである。14は沈線が施された胴部であるが、文様モチーフは不明である。
(平山)

(4) 土製支脚 (図14-15~28、写真14)

土製支脚は547.4 g 出土し、うち14点 (264.1 g) を図示した。全て棒状に作られた土製支脚で内孔を有し、1点を除く13点は体部片である。15~24・26~28は体部片。15~19の外形は多角柱状で、四角柱の四隅を面取りした八角柱を呈するものと思われ。特に18・19及び15・16・17には規格性が認められる。内孔形は全て円形で、芯材は15を除き、焼成前に抜かれていたものと思われる。20~23の外形も多角柱状であるが、規格性はそれほど認められない。内孔形は円形を呈する。24の体部は多角柱状と思われるが、残存部表面は成形時に四回にやや抉かれている状況が確認できた。内孔形は円形を呈する。26~28の外形は円柱状で、残存部外形はかなり摩耗している。内孔形は円形で、孔径が他個体に比べ、やや大きくなる傾向が認められる。芯材は26以外、焼成前に抜かれていたものと思われる。25は支・脚部片。平面形は多角形で、体部外形も多角柱状を呈していたものと思われる。内孔形は円形で、芯材は焼成前に抜かれていたものと思われる。孔径が他個体に比べ、やや大きい。色調は、破損面も含め淡橙～灰白色を呈している。
(佐森)

(5) 砥石 (図14-29~31、写真14)

3点 (31.8 g) 出土し、全て図示した。29は幅5 mm程の薄い板状の石の端部を使用面としたもの、30・31は繊面の1~2面を使用面としたもので、30は使用面の境界に稜ができる。石質は、29が珪質頁岩、30・31が凝灰岩である。

(6) 鉄滓 (図14-32、写真14)

1点 (45.1 g) 出土した (32)。表面は灰白色を呈し、上面は比較的平坦で、下面是半球状を呈する。内面は全体に密で重みがある。炉内滓と推定される。

その他被燃礫が26点680.7 g 出土した。2~3 cm程の小塊である。カマドの芯材もしくは製塙ないし鉄生産関連遺構に関連する可能性がある。石材は、凝灰岩が重量比で32.13% (218.7g)、石英34.52% (235.0g)、珪質頁岩33.35% (227.0g) である。

3 近世

近世の遺物は、陶器・磁器・銭貨が出土した。

(1) 陶磁器 (図14-33・34、写真14)

33は磁器の碗である。口縁部片で、内面の文様は波と思われるが小片のためはつきりしない。肥前IV～V期（1690～1860年代）の年代が推定される。34は陶器碗の腰部と思われる。灰釉で、近世の瀬戸・美濃の小碗と推定されるが、小片のため詳細な時期等は不明である。

(2) 銭貨 (図14-35、写真14)

35は寛永通寶一文銭の銅貨で、寛永通寶2期の通称新寛永（文銭）である。寛文8年（1668）以降の年代が考えられる。
(平山)



図12 遺構外出土遺物（1）

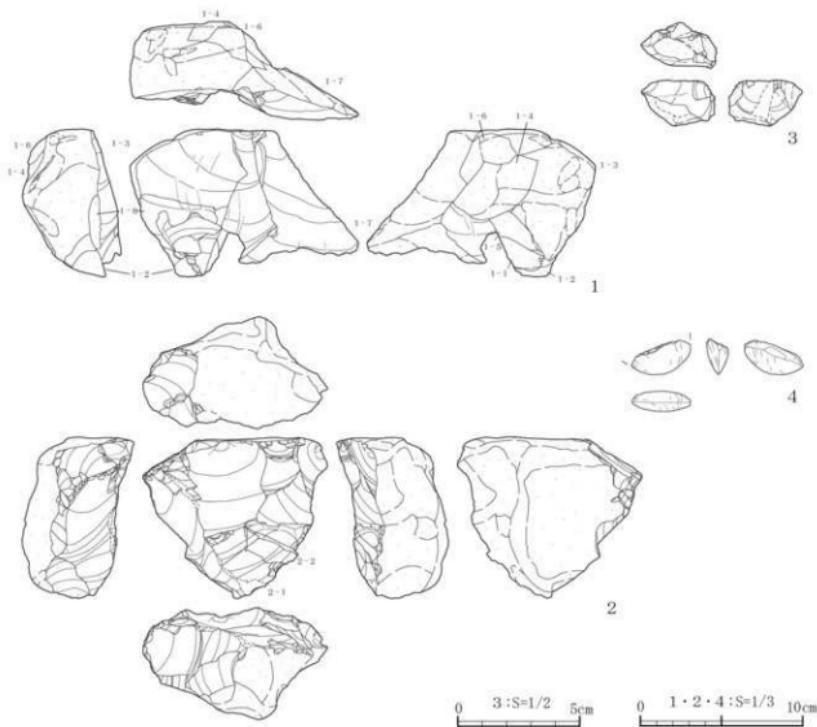


図13 遺構外出土遺物（2）

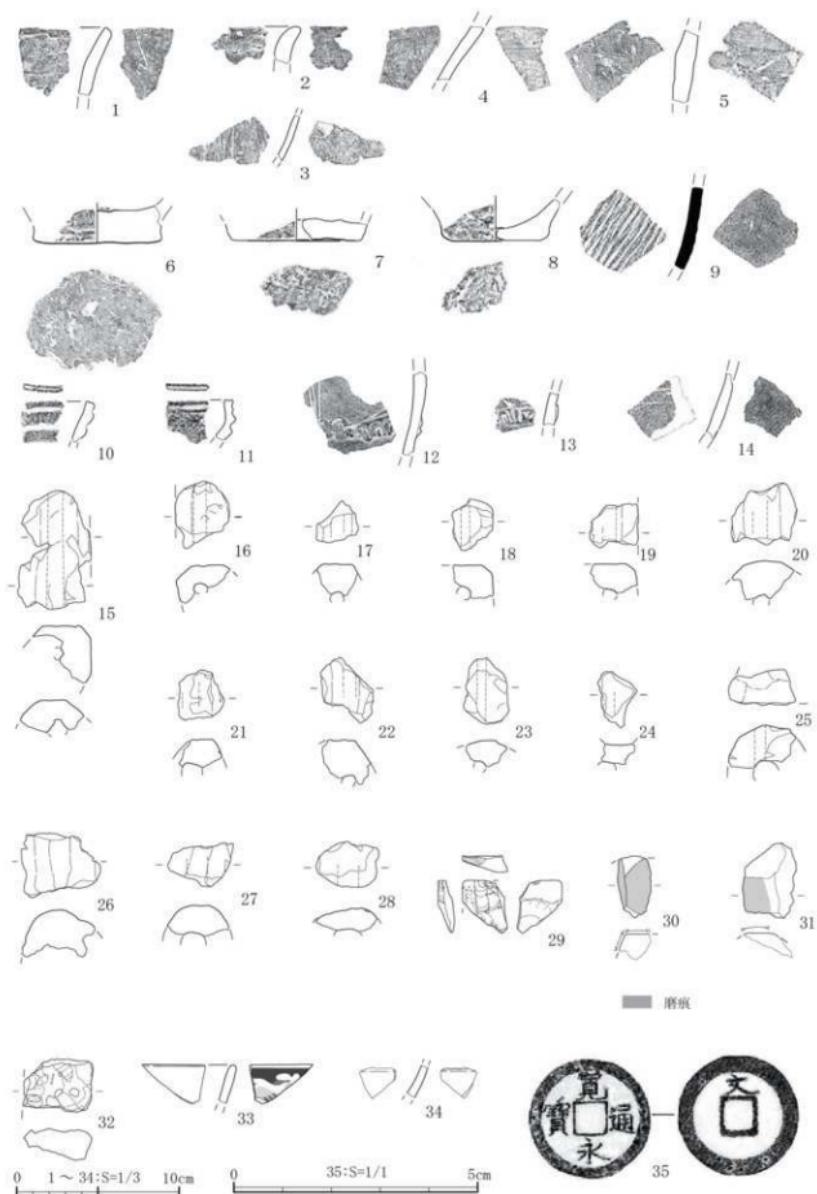


図14 遺構外出土遺物（3）

第4章 自然科学分析

第1節 上野平遺跡出土の火山灰について

弘前大学大学院・理工学研究科 佐々木 実

試料

分析を行った試料は、表1に示す2試料である。

分析方法および分析結果

上記2試料の火山灰について、以下の分析を行った。

提供された試料は、約10gを分取し、超音波洗浄機を用いて繰り返し水洗を行い含まれる粘土鉱物等の粒径数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、乾燥した。得られた粒子の実体顕微鏡による観察、および粒径250μmのふるいを通して試料を紫外線硬化樹脂により封止したスミアスライドの偏光顕微鏡による観察を行った。火山ガラスおよび火山灰起源鉱物の有無を確認し、その形態、構成鉱物の種類を記載した。

分析結果を表2に示す。またスミアスライドの偏光顕微鏡写真を図1に示す。

火山灰の帰属

火山灰1は、平安時代もしくはそれ以降と推定される土坑の堆積土上位に堆積した火山灰であり、白頭山-苦小牧テフラと予想されている。

白頭山-苦小牧テフラ(B-Tm)は、中華人民共和国および朝鮮民主主義人民共和国の国境に位置する白頭山(長白山)の10世紀の噴火によって生じたテフラであり、軽石型およびバブル型の無色火山ガラス、アルカリ長石およびエジリンオージャイトを含む(町田・新井, 2003)。本テフラの噴出年代は、AD946年の冬とされている(早川・小山, 1998; Oppenheimer et al., 2017:Hakozaki et al., 2018)。

表2に示すように、火山灰1は主としてバブル型の無色火山ガラス(粒径50μm程度)からなり、アルカリ長石およびエジリンオージャイトを含むことにより、白頭山-苦小牧テフラに帰属される。有色鉱物として微量の直方輝石・普通輝石および普通角閃石粒子が認められるが、これらは粒径100μm前後と火山ガラス粒子よりも粗粒であり、2次的に混入したものと推定される。

火山灰2は、堅穴建物跡の壁から採取されていることから、遺跡の年代より古い時代の堆積物に由来すると考えられる。斜長石・普通角閃石・直方輝石および普通輝石を含み、軽石型火山ガラスを主とする特徴からは、十和田八戸テフラに由来する可能性がある。ただし、火山ガラスの量が少ないことから、本試料が初生的な降下火山灰層からのものであるか、堆積後に2次的に移動したものであるかを判別することは、観察結果のみからは困難である。

十和田八戸テフラは、十和田カルデラのカルデラ形成期の最後の噴出物であり、降下火山灰と火碎流堆積物からなる。軽石型およびバブル型の無色火山ガラス、斜長石、直方輝石、普通輝石、およ

び普通角閃石を含む(町田・新井, 2003)。本テフラの噴出年代は、Horiuchi et al. (2007)により、15.5 cal ka BP とされている。

引用文献

- Hakozaki, M., Miyake, F., Nakamura, T., Kimura, K., Masuda, K., & Okuno, M. (2018) Verification of the Annual Dating of the 10th Century Baitoushan Volcano Eruption Based on an AD 774–775 Radiocarbon Spike. *Radiocarbon*, **60**, 261–268.
- 早川由紀夫・小山真人 (1998) 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—十和田湖と白頭山—. 火山, **43**, 403–407.
- Horiuchi, K., Sonoda, S., Matsuzaki, H. and Ohyama, M. (2007) Radiocarbon analysis of tree rings from a 15.5- cal kyr BP pyroclastically buried forest: a pilot study. *Radiocarbon*, **49**, 1123–1132.
- 町田 洋・新井房夫 (2003), 新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－. 東京大学出版会, 336p.
- Oppenheimer, C., L. Wacker, J. Xu, J.D. Galván, M. Stoffel, S. Guillet, C. Corona, M. Sigl, N. Di Cosmo, I. Hajdas, B. Pan, R. Breuker, L. Schneider, J. Esper, J. Fei, J.O.S. Hammond, U. Büntgen (2017) Multi-proxy dating the ‘Millennium eruption’ of changbaishan to late 946 CE. *Quat. Sci. Rev.*, **158**, 164–171.

表1 上野平遺跡 火山灰サンプル

サンプル番号	出土位置	層位	分析に使用した重量(g)	洗净後重量(g)
火山灰1	SK01	1層	11.2	1.2
火山灰2	SI01(B-B')	8層	42.0	1.3

表2 上野平遺跡 火山灰記載

サンプル番号	火山ガラス										鉱物	帰属
	bw	pm	br	pl	af	qz	opx	aug	ag-aug	ho	opq	
火山灰1	○	○	-	+	○	-	+	+	+	○	+	B-Tm
火山灰2	+	○	+	○	-	+	○	○	-	○	+	To-H?

○:含まれる; +:微量に含まれる; -:含まれない

bw: バブル型ガラス, pm: 軽石型ガラス, br: 褐色ガラス, pl: 斜長石, at: アルカリ長石, qz: 石英,

opx: 直方輝石, aug: 普通輝石, ag-aug: エジリンオージャイト, ho: 普通角閃石, opq: 不透明鉱物

B-Tm: 白頭山山苔小牧テフラ, To-H: 十和田八戸テフラ

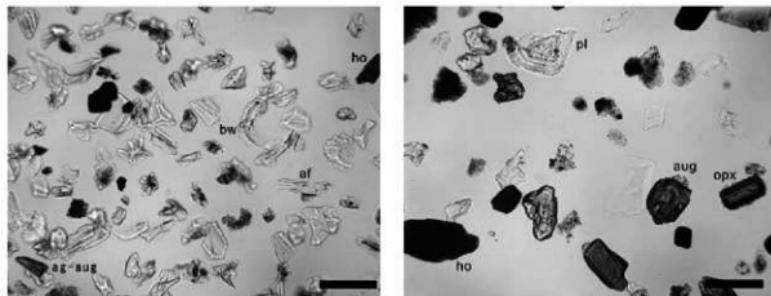


図1 火山灰試料の偏光顕微鏡写真。下方ポーラのみ（オープンニコル）。

左: 火山灰1、右: 火山灰2。右下スケールの長さは200μm。記号は表2に同じ。

第2節 放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体比測定

株式会社 バレオ・ラボ

1.はじめに

上野平遺跡より出土した土器に付着する炭化物を採取し、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。同時に、海洋リザーバー効果の影響や、炭化物の起源物質を推定するためには、炭素と窒素の安定同位体比を測定した。また、炭素含有量と窒素含有量を測定して試料のC/N比を求めた。

2. 試料と方法

試料は、土器1点(P-1)の内面と外面に付着した炭化物2点(試料No.1、2)である。土器はSI01堅穴建物跡から出土した壺で、平安時代の土器と考えられている。

放射性炭素年代測定の試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(バレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による推定時期	前処理データ	前処理
PLD-45895	遺構: SI01 堅穴建物跡 試料 No. 1 遺物 No. P-1	種類: 土器付着物 器種: 壺 部位: 口縁部～底部内面 状態: dry	平安時代	前処理前重量: 103.62mg 燃焼量: 4.61mg 精製炭素量: 1.30mg 炭素回収量: 0.56mg	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0mol/L, 塩酸: 1.2mol/L)
PLD-45896	遺構: SI01 堅穴建物跡 試料 No. 2 遺物 No. P-1	種類: 土器付着物 器種: 壺 部位: 脚部外側 状態: dry	平安時代	前処理前重量: 72.67mg 燃焼量: 2.44mg 精製炭素量: 1.19mg 炭素回収量: 0.45mg	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0mol/L, 塩酸: 1.2mol/L)

炭素・窒素安定同位体比測定は、超音波洗浄、アセトン洗浄および酸・アルカリ・酸洗浄の前処理後の試料を、EA(ガス化前処理装置)であるFlash EA1112(Thermo Fisher Scientific社製)を用いて、炭素含有量および窒素含有量の測定を行った。スタンダードは、アセトニトリル(キシダ化学製)を使用した。炭素安定同位体比($\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$)および窒素安定同位体比($\delta^{15}\text{N}_{\text{air}}$)の測定には、質量分析計DELTA V(Thermo Fisher Scientific社製)を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比にはIAEA Sucrose(ANU)、窒素安定同位体比にはIAEA N1を使用した。

測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させた。次に、還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムでCO₂とN₂を分離、そのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。EAで得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比(モル比)を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦

年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、暦年較正結果を、表3に¹³C/¹⁴C比を、表4に炭素安定同位体比と窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N比を示す。また、図1に暦年較正結果、図2に炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係、図3に炭素安定同位体比とC/N比の関係を示した。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	測定回数	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-45895 試料No. 1 遺物No. P-1	9	-23.53 \pm 0.23	1540 \pm 19	1540 \pm 20	482-491 cal AD (7.01%) 537-573 cal AD (61.26%)	437-463 cal AD (9.95%) 476-499 cal AD (12.89%) 510-515 cal AD (0.93%) 531-593 cal AD (71.68%)
PLD-45896 試料No. 2 遺物No. P-1	9	-26.07 \pm 0.18	1587 \pm 19	1585 \pm 20	434-467 cal AD (29.67%) 473-482 cal AD (7.42%) 490-518 cal AD (23.73%) 528-537 cal AD (7.45%)	427-542 cal AD (95.45%)

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正には0xCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表3 各測定での¹³C/¹⁴C比(‰)

測定番号	PLD-45895	PLD-45896
1	1.0963	1.0946
2	1.0961	1.0938
3	1.0961	1.0939
4	1.0967	1.0936
5	1.0971	1.0936
6	1.0973	1.0941
7	1.0977	1.0939
8	1.0975	1.0942
9	1.0972	1.0946

表4 硫素・窒素安定同位体比測定結果

試料番号	試料情報	$\delta^{15}\text{N}_{\text{air}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}_{\text{env}}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比
PLD-45895 試料No. 1 遺物No. P-1	種類：土器付着物 備考：内面	-23.3	8.0	53.7	0.83	75.2
PLD-45896 試料No. 2 遺物No. P-1	種類：土器付着物 備考：外側	-23.2	6.3	55.3	0.36	178.1

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正および曆年較正を行った。以下、各試料の曆年較正結果のうち 2σ 曆年代範囲（確率95.45%）に着目して、結果を整理する。

SI01堅穴建物跡から出土した壙（P-1）の内面付着炭化物（試料No.1 : PLD-45895）は、437-463 cal AD (9.95%)、476-499 cal AD (12.89%)、510-515 cal AD (0.93%)、531-593 cal AD (71.68%)の曆年代であった。外面付着炭化物（試料No.2 : PLD-45896）は、427-542 cal AD (95.45%)の曆年代であった。

炭素・窒素安定同位体比分析では、試料No.1 (PLD-45895) の $\delta^{13}\text{C}$ は-23.3‰、 $\delta^{15}\text{N}$ は8.0‰、試料No.2 (PLD-45896) の $\delta^{13}\text{C}$ は-23.2‰、 $\delta^{15}\text{N}$ は6.3‰であった。図2で試料No.1 (PLD-45895) はC₃植物と海棲哺乳類の間でC₃植物に近い位置にプロットされ、試料No.2 (PLD-45896) は草食動物とC₃植物の重なる位置にプロットされた。試料No.1, 2とも窒素含有量が少なく、C/N比が非常に高かったため、いずれも図3にはプロットされなかった。今回得られた年代は推定時期よりも200年以上古く、海産物の影響も受けていないと考えられた。壙が埋没する過程で、火災などにより古い植物由来の炭化物が付着した可能性などが考えられる。

(AMS年代測定グループ)

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・山本 華)

参考文献

- 赤澤 威・南川雅男 (1989) 炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元. 田中 琢・佐原 真穂「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」: 132-143, クバブロ,
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)
- 坂本 稔 (2007) 安定同位体比に基づく土器付着物の分析. 国立歴史民俗博物館研究報告, 137, 305-315.
- 米田 穣 (2008) 丸根遺跡出土土器付着炭化物の同位体分析. 豊田市郷土資料館編「丸根遺跡・丸根

城跡」: 261-263, 豊田市教育委員会。

- Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002) Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44(2), 549-557.
- 吉田邦夫・宮崎ゆみ子 (2007) 煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究. 平成16-18年度科学研究補助金基礎研究B (課題番号 16300290) 研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」, 85-95.
- 吉田邦夫・西田泰民 (2009) 考古科学が探る火炎土器. 新潟県立歴史博物館編「火炎土器の国 新潟」: 87-99, 新潟日報事業社.

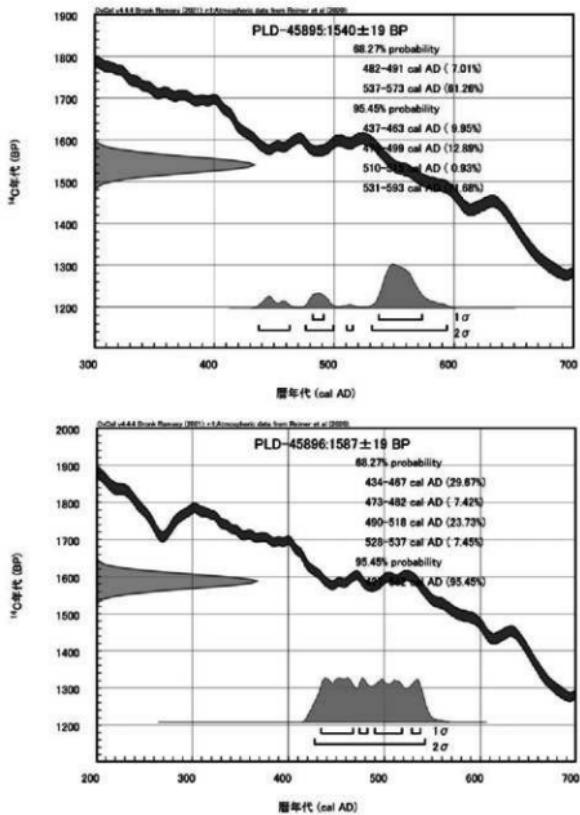


図1 历年較正結果

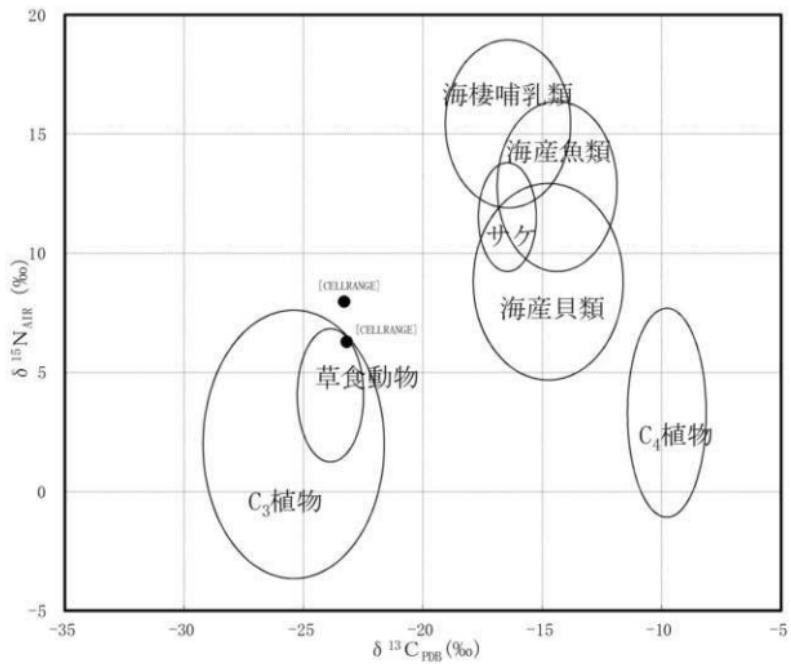


図2 炭素・窒素安定同位体比（吉田・西田(2009)に基づいて作製）

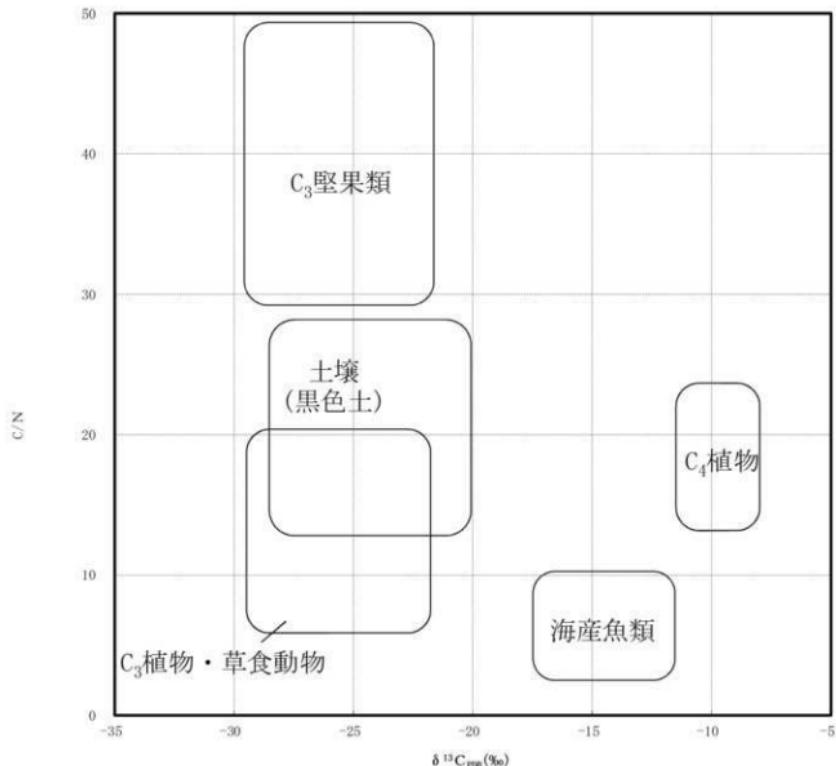
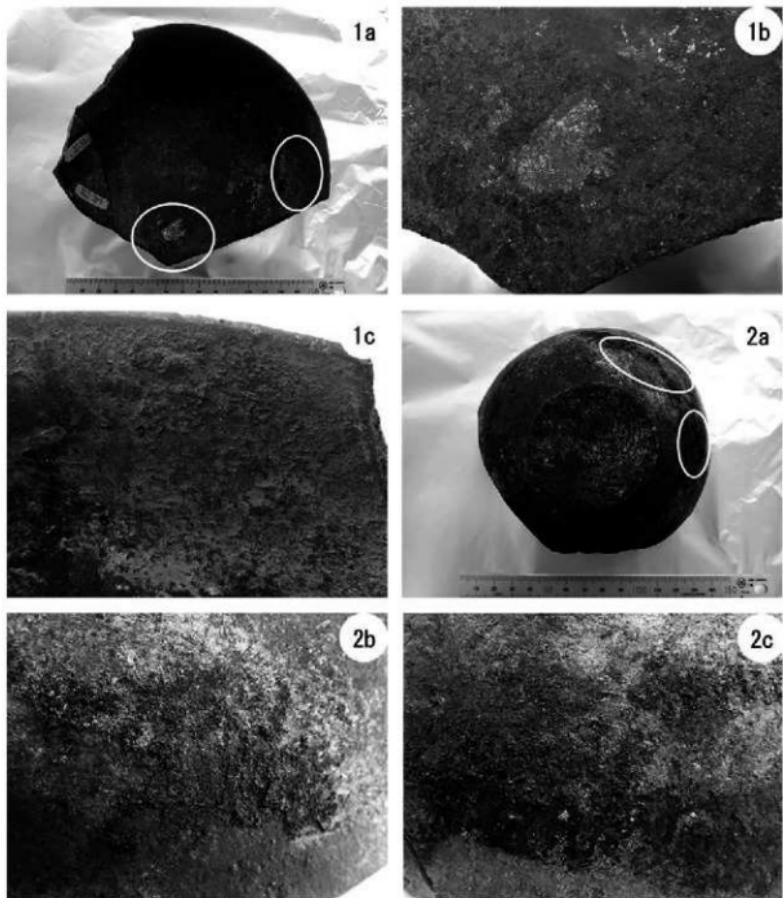


図3 炭素安定同位体比とC/N比の関係（吉田・西田(2009)に基づいて作製）



図版1 土器付着炭化物の試料写真

1. No. 1 (P-1 内面)、2. No. 2 (P-1 外面)

a : 全体写真、b・c : 試料採取箇所拡大写真、○ : 採取箇所

第5章 総括

第1節 繩文時代の上野平遺跡について

今回の調査では縄文時代の遺構は検出しなかった。縄文土器は、遺構外から総数で3点(48.6g)出土した。うち2点は胎土中に纖維が混入していることから、縄文時代前期と推定されるが、器面の摩耗が激しく土器型式等の比定はできない。残りの1点は口唇部にRLが施文されるものであるが、小片のため時期不明である。縄文時代の石器は、遺構外から総数で31点(1,698.5g)出土した。散漫的な出土で、特定箇所に集中するような出土はなかった。剥片石器が30点(1,690.5g)、礫石器1点(8.0g)である。石材は、珪質頁岩が重量比で98.50%を占め(29点・1,673.0g)、緑色凝灰岩1.50%(2点・25.5g)となっている。剥片石器の器種・石材組成について、表2にまとめた。

表2 石器組成表

表2-1 (全体)

石材 器種		点数合計 重量合計	構成比	珪質頁岩	構成比	緑色凝灰岩	構成比
石鎚	点数 重量	1 2.4	3.23% 0.14%	1 2.4	3.23% 0.14%		
石匙	点数 重量	1 13.5	3.23% 0.79%	1 13.5	3.23% 0.79%		
石核	点数 重量	3 1115.6	9.68% 65.68%	3 1115.6	9.68% 65.68%		
スクレイバー	点数 重量	2 78.9	6.45% 4.65%	1 61.4	3.23% 3.61%	1 17.5	3.23% 1.03%
二次加工のある剥片	点数 重量	1 8.9	3.23% 0.52%	1 8.9	3.23% 0.52%		
微細剥離のある剥片	点数 重量	5 151.6	16.13% 8.93%	5 151.6	16.13% 8.93%		
剥片	点数 重量	17 319.6	54.84% 18.82%	17 319.6	54.84% 18.82%		
磨製石斧	点数 重量	1 8.0	3.23% 0.47%			1 8.0	3.23% 0.47%
総計	点数 重量	31 1698.5	100.00% 100.00%	29 1673.0	93.55% 98.50%	2 25.5	6.45% 1.50%

表2-2（剥片石器組成表）

石材 器種		点数合計 重量合計	構成比	珪質頁岩	構成比	緑色凝灰岩	構成比
石鎌	点数 重量	1 2.4	3.33% 0.14%	1 2.4	3.33% 0.14%		
石匙	点数 重量	1 13.5	3.33% 0.80%	1 13.5	3.33% 0.80%		
石核	点数 重量	3 1115.6	10.00% 65.99%	3 1115.6	10.00% 65.99%		
スクレイバー	点数 重量	2 78.9	6.67% 4.67%	1 61.4	3.33% 3.63%	1 17.5	3.33% 1.04%
二次加工のある剥片	点数 重量	1 8.9	3.33% 0.53%	1 8.9	3.33% 0.53%		
微細剥離のある剥片	点数 重量	5 151.6	16.67% 8.97%	5 151.6	16.67% 8.97%		
剥片	点数 重量	17 319.6	56.67% 18.91%	17 319.6	56.67% 18.91%		
合計	点数 重量	30 1690.5	100.00% 100.00%	29 1673.0	96.67% 98.96%	1 17.5	3.33% 1.04%

表2-3（縄石器組成表）

石材 器種		点数合計 重量合計	構成比	緑色凝灰岩	構成比
磨製石斧	点数 重量	1 8.0	100.00% 100.00%	1 8.0	100.00% 100.00%
合計	点数 重量	1 8.0	100.00% 100.00%	1 8.0	100.00% 100.00%

石器は出土点数が少ないものの、石核と剥片の出土比率が高いこと、定形石器と同じ石材の石核が出土することから、遺跡内で石器製作が行われていたことが推測される。定形石器や二次加工のある剥片は小型のものが多いことから、小型の剥片石器を製作していた可能性が高い。石材はほぼ珪質頁岩に限られる。珪質頁岩はこの地域に分布する小沢層に由来するものと考えられ、遺跡直下の海岸には多量に散布していることから、容易に獲得できたと推定される。

過去調査でも縄文時代の遺構は検出されず、遺物の出土も僅かであった（橋・奈良1977）。しかしながら、遺跡周辺で縄文時代の遺物が採取されている（寺田1976）。また、今回の調査期間中にも遺跡周辺の住民から調査区の北側にある畠から縄文時代の遺物が出土したことを聞き、出土した石匙や磨製石斧を実見した。このことから、当遺跡の縄文時代の主体となる活動域は、今回の調査区の北側に広がっているものと考えられる。

第2節 平安時代の上野平遺跡について

1 遺構について

(1) 壊穴建物跡

調査区北東から1棟検出した。建物跡の北側約半分程度が調査区域外にあるため、建物跡全体の輪郭は不明である。本建物跡は造り替えられていることが判明し、新期をSI01（新）、古期の建物跡をSI01（旧）とした。検出した範囲では、SI01（新）の規模はSI01（旧）より小さく、SI01（旧）の中に入子状に構築されている。カマドは検出した建物範囲内では確認できなかった。調査区外に延びる壊穴建物跡北東壁もしくは北西壁に作られているものと推定される。上北北部・陸奥湾沿岸では10世紀以降に東カマドが主流になるとされる（宇部ほか2014）ことを勘案すると、北西壁よりも北東壁に作られていた可能性が高いが、下北地域での様相は後述のとおり調査事例が少ないため、今後の事例増加後に再度検討を要する。SI01（旧）の床面が平坦で、掘削工具痕と推定される凹凸が見られなかったため、調査時点ではSI01（新）の掘方SI01（旧）の直上までと判断していたが、図面等の検討からSI01（新）の掘方はSI01（旧）の床面を掘り込んでいる可能性がある。主柱穴と考えられる柱穴はSI01（新）では1基、SI01（旧）では2基検出した。SI01（旧）の柱穴は壁際に寄ったいわゆる「壁柱タイプ」で、6本柱の建物跡であった可能性がある。柱穴規模はSI01（新）に比べSI01（旧）の方が大きく、また、堆積状況から、SI01（新）のPit01とSI01（旧）のPit01は柱の抜き取り、SI01（旧）のPit02は柱の切取り行為があったと推測される。SI01（新）の床面から焼土・炭化物が多量に出土しており、焼失建物跡と判断される。遺物はSI01（新）から土師器の壺・甕、石器（砥石）、鉄生産関連遺物（鉄製品・鉄滓・羽口溶解物）が、SI01（旧）から土師器の甕が出土した。SI01（新）では主に床面から出土した。壺の9-2は外外面に炭化物が付着している。甕は外側がケズリ・内面はナデが卓越するものがほとんどで、器表面に顕著な被熱痕跡が認められるものもある。甕の9-3は底部に向かって急激にすぼまる器形である。その他、被熱礫や焼成粘土が出土した。これらがカマドの芯材や構築材であった場合、建物跡の廃棄の際にカマドが壊された可能性がある。堆積土中に白頭山-苦小牧火山灰が確認できなかったことから、10世紀中葉以降の構築年代が推定され、後述する遺物の年代から11世紀前葉に廃絶した建物跡と考えられる。

下北地域における平安時代の壊穴建物跡は、むつ市川内町田野沢（1）遺跡・むつ市最花遺跡（旧最花南遺跡）・むつ市第一田名部小学校校庭遺跡・むつ市内田（1）遺跡・東通村銅屋（3）遺跡・東通村アヌ野遺跡・東通村将木館遺跡・東通村向野（2）遺跡・東通村福崎遺跡で調査事例があり、本遺跡で10遺跡目になると思われる。時期が分かる建物跡の多くは10世紀前半とされ、本遺跡と同時期のものは将木館遺跡が該当しそうであるが、数が少なく各建物跡の比較ができる状況はない。現時点では下北地域の最西で確認された平安時代の建物跡と指摘するに留め、資料の増加を待ちたい。

(2) 土坑

3基検出した。調査区の縁辺に位置し、平面形は楕円形である。第1号は第1層中に白頭山-苦小牧火山灰が窪地に自然堆積しており、火山灰降下年代である10世紀中葉以前に構築・廃絶・埋没していたと推定される。SI01（新）期には白頭山-苦小牧火山灰が確認できなかったことから、少なくとも第1号土坑はSI01（新）より古い位置付けが可能である。後述する出土遺物とも整合しており、調

査区周辺域に集落がある可能性が考慮される。第1号土坑以外は遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明であるが、検出層位等から平安時代もしくはそれ以降の可能性がある。用途や性格は不明である。

(3) 焼土遺構

4基検出した。調査区中央と南北端に位置し、平面形は不整形である。被熱範囲は黒褐色に橙色粒が混入する程度で、しまりはあるが、被熱は顕著ではない。時期を示す遺物は出土しなかつたが、検出層位から平安時代以降と考える。被熱の厚さが使用時間に比例するものと仮定すると、その期間は短かったものと推定される。北海道では、屋外炉の灰の片付けや生活廃棄の廃棄行為の痕跡とされる「焼土粒集中」が擦文時代に伴って検出されており、そのような遺構である可能性もある。

2 遺物について

平安時代の出土遺物を図15・16にまとめた。

(1) 土師器（図15-1～20）

竪穴建物跡（SI01（新））からの出土が大半を占める。遺構外からは散漫的な出土状況を示し、特定箇所に集中するような出土はなかった。

遺構内外から土師器の壺・甕が3,058.3g出土した。壺は2点出土した。いずれも竪穴建物跡（SI01（新））から出土したものである。ロクロ形成で、内面黒色処理がされているもの（1）とされないものの（2）がある。2の口径は11.2cmと推定される。底部は欠損しているものの、断面の屈曲具合から底部に近いものと推定される。器高は低く、器壁も薄い。小振りのものである。1は床面から正立状態で出土したもので、外面に炭化物が付着している。炭化物は、内面には斑状・外面には帯状に付着する。付着炭化物について、放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体を行ったところ（第4章第2節参照、土器内面：PLD-45895・試料No.1 / 土器外側：PLD-45896・試料No.2）、5世紀前葉～6世紀末葉の年代と、C₃植物に近いもしく草食動物とC₄植物との分析結果が得られた。SI01（新）は焼失建物跡であり、焼失した建物跡の建築部材が土器表面に付着した可能性がある。出土した壺は2点ではあるものの、大型のものと小振りなものと2極化しており、10世紀後半以降の年代が考えられる。3～20は甕である。全体に被熱しており、6・7・19は特に顕著である。器面調整は、外面はケズリ・内面はナデが卓越する。3は底面以外ほぼ復元できた。底部に向かって急激にすぼまる器形である。平川市（旧碇ヶ関村）古館遺跡や北海道松前町札前遺跡から類似した器形の甕が出土している。口縁部の内外面に煤の付着が、内面に被熱痕跡が認められる。4～8は口縁部で、頸部は短く、強く外反する。9～16は胴部で、14はロクロ形成のものである。17～20は底部で、底面はナデ調整のもの（17・18）とケズリ調整のもの（19・20）がある。底部は張り出さない。6・7・10は製塙土器の可能性がある。以上のように、土師器甕の頸部や器面調整の特徴および遺構の構築年代から10世紀中葉～後葉以降と考えられ、古館遺跡や札前遺跡の年代から11世紀前葉まで下ることも考えられる。

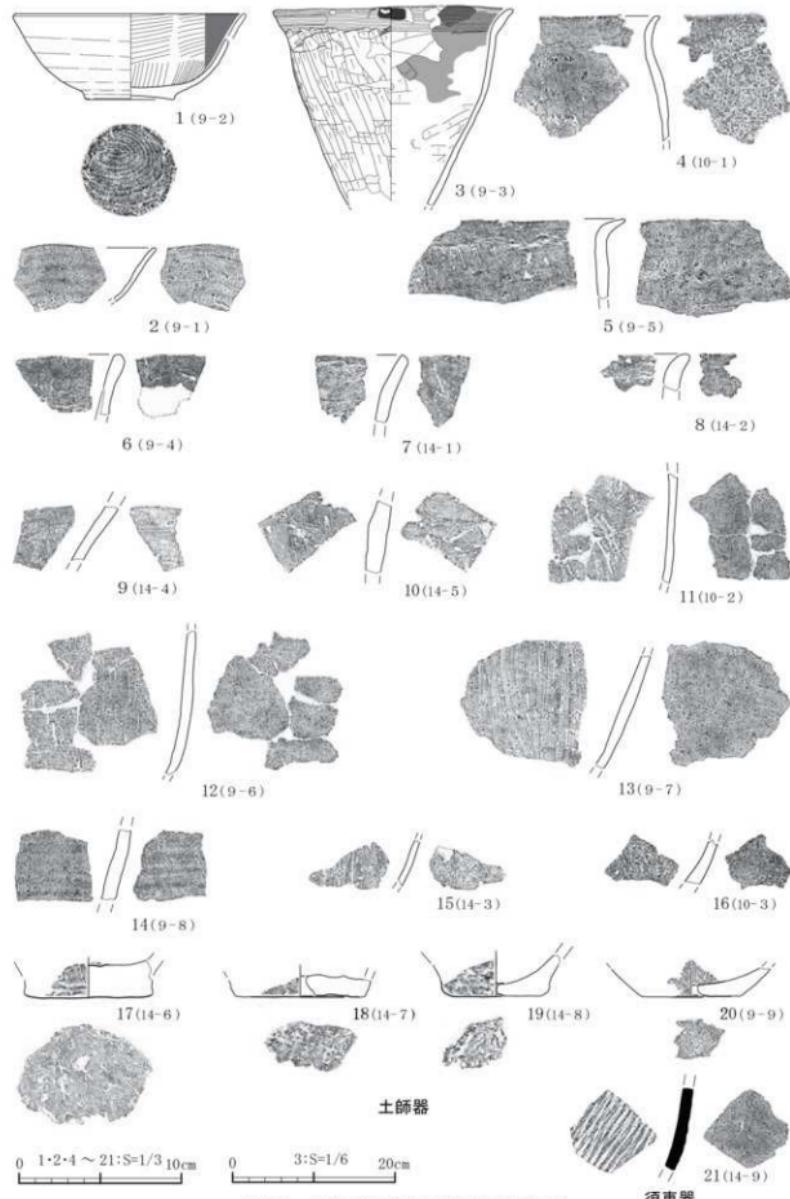


図15 上野平遺跡出土遺物集成図(1)

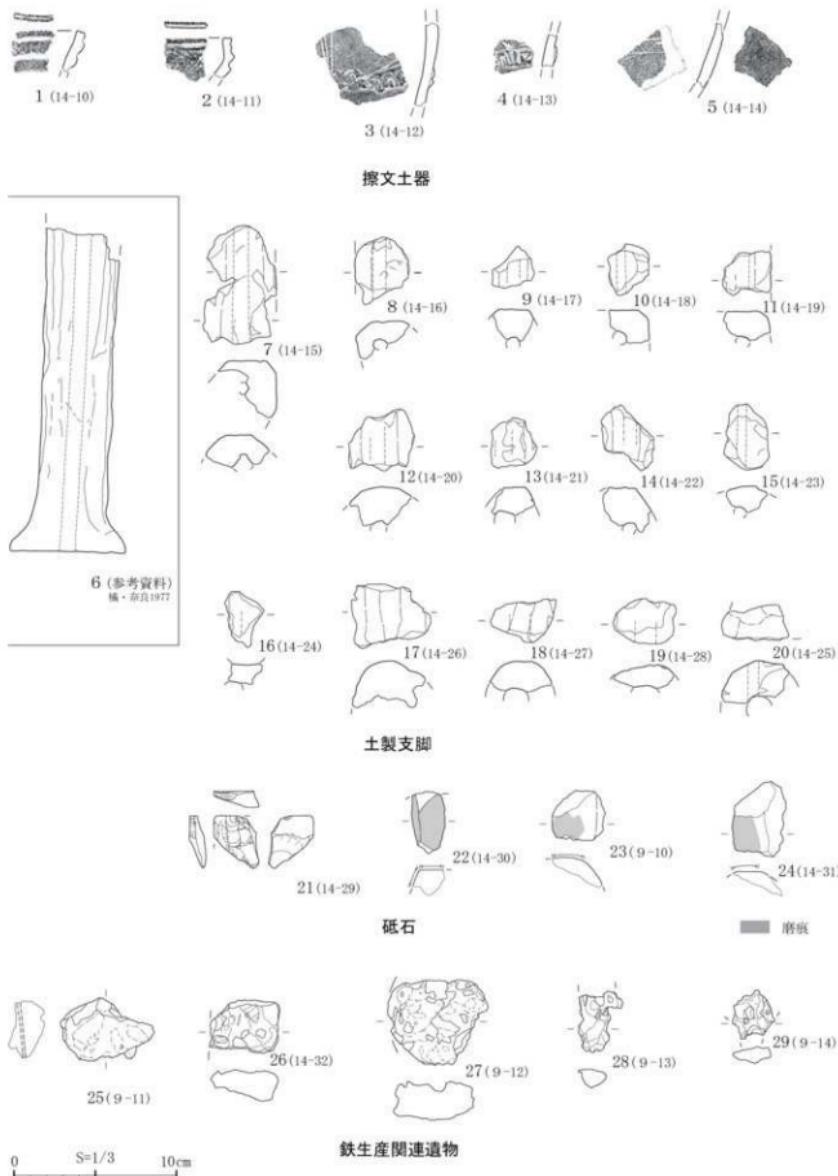


図16 上野平遺跡出土遺物集成図(2)

(2) 須恵器 (図15-21)

須恵器は遺構外から1点 (20.4 g) 出土した。甕の胴部片で、外面はタタキ、内面にはナデが見られる。諸特徴から五所川原窯跡群と推測され、10世紀中葉以降の時期が推定される。

(3) 撥文土器 (図16-1~5)

撥文土器は遺構外から5点 (47.0 g) 出土した。全て甕で、外面にハケメ、内面にミガキが施されたものである。1・2は口縁部、3~5は胴部である。口縁部は外面と口唇部に沈線が施されたもので、2の外面には小口状の工具によると思われる刺突が矢羽状に施されている。3・4は貼付圓綱帯が施された胴部片で、貼付圓綱帯の上面には馬蹄形文が施されたものである。5は沈線が施された胴部であるが、文様モチーフは不明である。前回調査で1と同様のものは第3類撥文土器に分類されている（橘・奈良1977）。これは斎藤のI群土器（斎藤2002）・塙本のS2期もしくはS4期（塙本2002）・鈴木のII-A類もしくはII-B類（鈴木2006）に相当すると考えられる。9世紀後葉から10世紀中葉の時期が想定されている。2と同様のものは第2類撥文土器に分類され、同じく斎藤のII群土器・塙本のS8期～S9期・鈴木のII-D類に相当する。10世紀前葉から後葉の時期が仮定されている。3・4と同様のものは第1類撥文土器に分類され、斎藤のIII群土器・塙本のS9期に相当する。10世紀中葉から11世紀前葉の年代が考えられているが、貼付圓綱帯が施されていることから11世紀（鈴木2006）の年代と考えたい。5は横走沈線がないことから斎藤のIII群もしくはIV群土器と推定される。

（平山）

(4) 土製支脚 (図16-7~20)

土製支脚は遺構外から547.4 g出土した。全て内孔を有する棒状のもので、多角柱状のものと円柱状のものがある。図示した14点 (264.1 g) のうち1点を除く13点は体部片である。色調は、破損面も含め淡橙～灰白色を呈している。7~19は体部片である。7~16の外形は多角柱状で、四角柱の四隅を面取りした八角柱を呈するものと思われる。内孔形は全て円形で、芯材は7を除き、焼成前に抜かれていたものと思われる。17~19の外形は円柱状で、残存部外形はかなり摩耗している。内孔形は円形で、孔径が他個体に比べ、やや大きくなる傾向が認められる。芯材は17以外、焼成前に抜かれていたものと思われる。20は支・脚部片である。平面形は多角形で、体部外形も多角柱状を呈していくものと思われる。内孔形は円形で、芯材は焼成前に抜かれていたものと思われる。孔径が他個体に比べ、やや大きい。多角柱状のものでは規格性が窺われる（特に7・8・9および10・11）。今回の調査では多角柱状のものと円柱状のものとが出土したことになるが、出土状況から時期差や同時性は判明しなかった。なお、前回の調査では多角柱状のものが出土している（橘・奈良1977）。参考資料として、残存率が高いものを提示した（6）。10角柱と報告されているものである。平内町大沢遺跡でも多角柱状のものと円柱状のものとが出土しており、10世紀後半から11世紀後葉の年代が考えられている（青森県教育委員会2005）。

今回の調査では製塩遺構は確認できなかった。製塩土器も出土しなかったが、前述のように土師器の甕としたものの一部に製塩土器が混在している可能性がある。昭和51年の調査では製塩遺構が検出されており、これは標高約9 mと遺跡の中でも高所に設置されている。陸奥湾からの距離は然程では

ないものの、海面から比高のあるところに直接多量の海水を運び込むのは困難であることから、遺跡近辺の長浜海岸辺りで採鹹工程が行われ、遺跡内で煎熬を行っていたものと推測される。なお、遺跡の所在する宿野部は近世に塩釜が築かれたことが文献記録に残っている（川内町2005）。（佐森）

（5）石器（図16-21～24）

石器は砥石が4点（48.7g）出土した。第1号堅穴建物跡（新）の堆積土から1点（23：16.9g）、遺構外から3点（21・22・24：31.8g）の出土である。礫面の1～2面を使用面としたものである。全て破損した小片であるが、使用によるものであるかは判然としない。石材は、21が珪質頁岩で、他は凝灰岩である。21は薄い板状の石の端部を使用面としたものである。なお、前回の調査でもデイサイト（石英安山岩）製の砥石が2点出土している（橘・奈良1977）。

（6）鉄生産関連遺物（図16-25～29）

鉄生産関連遺物は5点（179.8g）出土した。第1号堅穴建物跡（新）の堆積土から4点（25・27～29：134.7g）、遺構外から1点（26：45.1g）の出土である。25は板状の鉄製品・26～28は鉄滓、29は羽口溶解物と思われる。26の表面は灰白色を呈し、上面は比較的平坦で、下面は半球状を呈する。内面は全体に密で重みがある。炉内滓と推定される。27の表面は赤褐色を呈し、上面は比較的平坦で、下面は半球状を呈する。内面は全体に密で重みがある。碗形滓である。28の表面は赤褐色と灰白色が混在し、上面は比較的平坦で、断面は半円状を呈する。炉内流动滓と思われる。製鉄から鍛冶までの過程を示す鉄滓が出土しており、調査区周辺域に鉄生産関連遺構が存在するものと推測する。調査区付近では羽口が採取されている（橘・奈良1977）。

3 平安時代の様相について（図17）

上野平遺跡は、昭和51年の調査で平安時代の製塩遺構が検出され、土師器・擦文土器・土製支脚・鉄製品等が出土している。今回の調査では堅穴建物跡・土坑を検出し、昭和51年の調査区の一部を確認した。遺物は土師器・須恵器・擦文土器・土製支脚・鉄製品等が出土した。

上記のとおり、今回の調査区における土地利用変遷は、10世紀中葉以前と10世紀中葉から11世紀前葉の2期になると推定され、後者が主体と考えられる。堅穴建物跡は調査区北東端で検出したことから、居住域は遺跡東端の宿野部川に面した丘陵崖付近に展開していた可能性が高い。製塩遺構は、確認された昭和51年調査の調査区配置から、今回調査区の北西側に位置していたことが判明した。居住域と空間を分けていた可能性がある。また、製塩遺構は周辺より高まつた場所に位置していることから、採鹹過程は海岸付近で行われていたと推測される。煎熬工程のみでなく、製塩土器・土製支脚の製作等の労力を考えると、自家消費よりも交易を目的としていたと推定される。鉄生産関連遺構は検出できなかったが、製鉄から鍛冶までの過程を示す鉄滓が出土していること、調査区付近で羽口が採取されていることから、調査区周辺域に鉄生産関連遺構が存在するものと推測される。おそらく調査区外の北側であろう。出土遺物は9世紀後葉から10世紀中葉と10世紀中葉から11世紀前葉の年代が考えられ、主体は後者であった。土師器・石器・鉄生産関連遺物は堅穴建物跡内から出土したものが多い。土製支脚は調査区北西から出土したものが多く、製塩遺構との関連が窺われる。擦文土器も同様

の出土を示し、昭和51年の調査でも製塩遺構付近から出土している。

当遺跡は陸奥湾沿岸に位置する平安時代の集落遺跡で、降下火山灰や出土遺物から、その存続期間は10世紀中葉以前から11世紀にかけてであると推測される。また、生産活動（製塩・鉄生産）を行っていた集落で、活動域の中心は今回の調査区北側の段丘中央寄りであったと考えられる。製塩や鉄生産は多量の燃料を必要とすることから、集落の機能時には周辺の木々はほとんどが伐採されると推定され、現状では山林となっている遺跡近辺の景色も当時はかなり違っていた可能性が高い。平安時代でも10世紀中葉以前と10世紀中葉から11世紀前葉と考えられる遺構・遺物があるため、大きく2時期が想定される。前者は第1号土坑と擦文土器の一部、後者は第1号堅穴建物跡と土師器・擦文土器の一部・土製支脚である。下北半島は各時代を通して北海道との関係を保つ地域であり、本遺跡も擦文土器の出土から北海道と関連を持っていたと考えられる。本遺跡の主体となる10世紀中葉から11世紀前葉は、北東北で区画（防御性）集落が盛行する。今回の調査で確認されていないが、調査区外に濠が存在する可能性もある。

なお、調査区より北の地点から奈良時代の土師器が採取されていることから（橋・奈良1977）、今回の調査区の北側に奈良時代の遺構が存在すると推定される。また、今回の調査では遺構・遺物は検出しなかったが、調査区より南東の地点で人骨が発見されており（森本・橋1974）、中世には遺跡南端が埋葬域として利用されている。

（平山）

Y=8,200

X=13,0400

X=13,0300



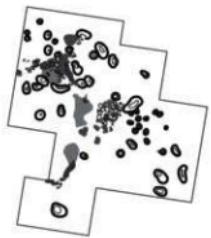
Y=8,100

(縄文時代?)
(奈良時代?)

居住域
(平安時代)

製塩活動域
(平安時代)

昭和51年調査区



木片
石器
焼土

0

S=1/200

10m

1/1,000

50m

図17 上野平遺跡の土地利用状況



引用参考文献

- 青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さんグループ 2003 『下北半島西通りの民俗』青森県史叢書
- 青森県教育委員会 1980 『古館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第54集
- 青森県教育委員会 1986 『西通道』青森県「歴史の道」調査報告書
- 青森県教育委員会 1993 『高野川（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第153集
- 青森県教育委員会 1995 『高野川（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第179集
- 青森県教育委員会 1995 『板子塚遺跡・熊ヶ平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第180集
- 青森県教育委員会 2005 『大沢遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書 第386集
- 青森県教育委員会 2018 『内田（1）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第592集
- 青森県教育委員会 2020 『青森県遺跡詳細分布調査報告書32』青森県埋蔵文化財調査報告書 第615集
- 青森県史編さん考古部会 2005 『青森県史 資料編 考古3 弥生～古代』
- 川内町 1999 『川内町史 民俗編 自然I（気象、地形地質）編』川内町史編さん委員会
- 川内町 2005 『川内町史 原始・古代編 中世編 近世編』川内町史編さん委員会
- 川内町教育委員会 1991 『戸沢川代遺跡発掘調査報告書』
- 松前町教育委員会 1985 『札前 国道228号線改良拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告』
- 岩井浩介 2004 「早稲田遺跡出土資料の再検討」『金沢大学考古学紀要』第27号 金沢大学文学部考古学講座
- 岩井浩介 2010 「早稲田遺跡出土資料の再々検討」『青森県考古学』第18号 青森県考古学会
- 岩井浩人 2009 「津軽地域性における古代土器食膳具の変遷－9世紀から11世紀を中心にして－」『青山考古』第24号 青山考古学会
- 岩井浩人 2009 「津軽南域における古代の土器様相」『扶桑 田村晃一先生喜寿記念論文集』青山考古学会田村晃一先生喜寿記念論文集刊行会
- 内田武志・宮本常一編 1971 『菅江真澄全集』第二巻 株式会社 未来社
- 宇部則保 2010 「9・10世紀における青森県周辺の地域性」『古代末期の境界世界』法政大学国際日本学研究所
- 宇部則保・大野 亨・加藤隆則 2014 「5. 下北・上北・三八地区」『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』北東北古代集落遺跡研究会
- 江坂輝弥 1967 「下北半島の先史・歴史時代遺跡」『下北 自然・文化・社会』九学会連合下北調査委員会
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 北林八洲晴 2005 「続 青森の塙づくり－現状と展開－」『葛西 効先生還暦記念論文集 北奥の考古学』葛西 効先生還暦記念論文集刊行会
- 齋藤 淳 2002 「本州における擦文土器の変遷と分布について」『海と考古学とロマン』市川金丸先生生古希を祝う会
- 齋藤 淳 2008a 「北奥出土の擦文土器について」『青森県考古学』第16号 青森県考古学会

- 齋藤 淳 2008b 「北奥「蝦夷」社会の展開」『地域と文化の考古学II』明治大学文学部考古学研究室
- 齋藤 淳 2010 「野尻遺跡群の土器編年について」『研究紀要』第15号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 齋藤 淳 2012 「北奥における掠文（系）土器の終末について」『青森県考古学』第20号 青森県考古学会
- 齋藤 淳 2013 「古代北奥・北海道におけるロクロ整形食膳具の地域性について」『青森県考古学』第21号 青森県考古学会
- 齋藤 淳 2016 「北奥「蝦夷」集落の動態」『考古学ジャーナル』688
- 齋藤 岳 2004 「下北半島ムシリ遺跡採集の石刃鐵—小野忠正氏採集資料の再評価—」『北海道考古学』第40輯 北海道考古学会
- 鈴木琢也 2006 「擦文土器からみた北海道と東北北部の文化交流」『北方島文化研究』第4号 北方島文化研究会
- 高杉博章 1977 「本州における掠文土器の様相」『考古学風土記』第2号
- 高橋 透 2013 「東北地方における古代の塩の生産と流通—陸奥湾から太平洋沿岸地域を中心に—」『第16回 古代官衙・集落研究会報告書 塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所報告書 第12冊 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 橋 善光・奈良正義 1977 「青森県宿野部上野平遺跡—掠文時代の製塩遺跡—」『北海道考古学』第13輯 北海道考古学会
- 塚本浩司 2002 「掠文土器の編年と地域差について」『東京大学考古学研究室研究紀要』第17号 東京大学考古学研究室
- 塚本浩司 2004 「10世紀中葉以降、東北北部出土の掠文土器の分類とその背景について」『北方研究』第6号 北方懇話会
- 寺田徳徳 1976 「下北郡川内町上の平遺跡」『考古風土記』創刊号
- 永井久美男編 1998 『近世の出土銭II一分類図版篇一』兵庫埋蔵銭調査会
- 箱崎真隆 2021 「年輪年代学の現在」『樹木・木材と年代研究』国立歴史民俗博物館研究叢書8 朝倉書店
- 森田賢司 2015 「最花南遺跡隣接地試掘調査報告」『むつ市文化財調査報告第43集』むつ市教育委員会
- 森田賢司 2018 「田野沢（1）遺跡確認調査報告」『むつ市文化財調査報告第47集』むつ市教育委員会
- 森本岩太郎・橋 善光 1974 「下北半島西通発見の人骨と陶器」『北奥古代文化』第6号 北奥古代文化研究会
- 山田秀三 1983 『山田秀三著作集 アイヌ語地名の研究』第二巻 株式会社 草風館（初出1971）
- 八木光則 2010 「古代末期の北奥蝦夷社会」『古代末期の境界世界』法政大学国際日本学研究所
- 横山英介 1990 『掠文文化』考古学ライブラリー59 ニュー・サイエンス社

表3 土器觀察表

調査番号	調査名	出土位置	層位	種類	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外観調整	内面調整	備考
調9-1	S101		I層	土師器	片	口縁部	(11.2)	(3.4)	ロクロ	ロクロ		
調9-2	S101		床面・I層	土師器	片	口縁～胴	14.6	5.6	5.3	ロクロ	ロクロ	P-1 回転系切 断化物付着
調9-3	S101		床面・I層	土師器	甕	口縁～頸	(29.8)	(26.7)	ヨコナヂ・ケズリ	ヨコナヂ・ナヂ	P-2 保有者 被熱	
調9-4	S101		I層	土師器	甕	口縁部		(3.7)	ヨコナヂ	ヨコナヂ	被熱、製陶土器の可能性	
調9-5	S101		I層	土師器	甕	口縁部		(4.8)	ヨコナヂ・ケズリ	ヨコナヂ・ナヂ		
調9-6	S101・S101(裏面)		I層・4層・Ⅲ層上面	土師器	甕	頸部		(8.6)	ケズリ	ナヂ		
調9-7	S101B-B'セク		床面	土師器	甕	頸部		(6.7)	ケズリ	ナヂ		
調9-8	S101		I層	土師器	甕	頸部		(4.3)	ロクロ	ロクロ		
調9-9	S101		4層	土師器	甕	底部	(6.0)	(1.7)	ケズリ	ナヂ	外底面ケズリ	
調10-1	S101(Ⅲ)S061		I層	土師器	甕	口縁部	(7.4)	ヨコナヂ・ケズリ	ヨコナヂ・ナヂ	被熱		
調10-2	S101・S101(Ⅲ)		I層・Ⅲ層	土師器	甕	頸部		(6.5)	ケズリ	ナヂ		
調10-3	S101(Ⅲ)S061		I層	土師器	甕	頸部		(1.9)	ケズリ	ナヂ		
調11-1	S061		I層・I層上部	土師器	甕	頸部		(6.2)	ケズリ	ナヂ		
調12-1	SS1調査区		埋土	調文	深鉢	頸部	(5.0)	多輪形全体			磁羅混入 磁時代前期	
調12-2	試掘トレンチ	M-10～13		調文	深鉢	頸部	(3.6)	不明			磁羅混入 磁時代前期	
調12-3	SS1調査区	B06	埋土	調文	深鉢	口縁部	(2.0)	黒文			口唇に黒文	
調14-1	SS1調査区	A'05	埋土	土師器	甕	口縁部	(4.1)	ヨコナヂ	ヨコナヂ	製陶土器の可能性		
調14-2	試掘トレンチ	M-10～13		土師器	甕	口縁部	(2.1)	ヨコナヂ	ヨコナヂ			
調14-3	SS1調査区	M-20	埋土	土師器	甕	頸部	(2.7)	ケズリ	ナヂ			
調14-4	SS1調査区	A'05	埋土	土師器	甕	頸部	(3.0)	ケズリ	ナヂ			
調14-5		P-11	覆瓦	土師器	甕	頸部	(4.0)	ケズリ	ナヂ			
調14-6	調査区西側	0-5	I	土師器	甕	頸部	(6.0)	(2.6)	ケズリ	ナヂ	外底面ナヂ	
調14-7		表振		土師器	甕	底部	(6.0)	(1.6)	ケズリ	ナヂ	外底面ナヂ(マジ)	
調14-8		P-19	I	土師器	甕	底部	(6.7)	(2.6)	ケズリ	ナヂ	被熱 外底面ケズリ	
調14-9	SS1調査区		埋土	重底器	甕	口縁～胴	(4.8)	タタキ	ナヂ			
調14-10	SS1調査区	M03	埋土	織文土器	甕	口縁部	(2.6)	沈澱	ヨコナヂ・ミガキ	摩滅		
調14-11	SS1調査区	B06	埋土	織文土器	甕	口縁部	(2.5)	沈澱・押型	ミガキ			
調14-12	SS1調査区	A'05	埋土	織文土器	甕	頸部	(4.1)	丸窓・ハケメ・貼付鉢縁	ミガキ			
調14-13		N-09	II	織文土器	甕	頸部	(2.6)	ハケメ・貼付圓錐形	ナヂ			
調14-14	SS1調査区	B06	埋土	織文土器	甕	頸部	(3.8)	沈澱・ハケメ	ミガキ	被熱		

表4 石器観察表

図版番号	造様名	出土位置	層位	器種	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
図9-10	S101		I	磨石器	磨石	(3.1)	(3.4)	(1.8)	16.9	麻灰岩	
図12-4	試掘トレンチ I	M-10~13		剥片石器	石鏃	4.7	1.6	0.5	2.4	硅質頁岩	有茎平基
図12-5		O-15	II	剥片石器	石劍	6.4	3.5	0.9	13.5	硅質頁岩	細長
図12-6		K-17	II	剥片石器	スクレイバー	9.0	5.1	1.7	61.4	硅質頁岩	
図12-7		-	表層	剥片石器	スクレイバー	3.5	4.5	1.6	17.5	綠色板岩	
図12-8	試掘トレンチ I	M-10~13		剥片石器	二次加工のある剥片	4.5	2.5	1.0	8.9	硅質頁岩	
図12-9		K-20	II	剥片石器	微細刻離のある剥片	4.7	6.9	1.9	36.1	硅質頁岩	
図12-10		O-21	III	剥片石器	微細刻離のある剥片	5.6	2.7	0.9	8.3	硅質頁岩	
図12-11		P-6	III	剥片石器	微細刻離のある剥片	5.9	4.6	1.5	19.7	硅質頁岩	
図12-12		W-9	III	剥片石器	微細刻離のある剥片	4.7	3.6	1.1	10.9	硅質頁岩	
図12-13		X-6	III	剥片石器	微細刻離のある剥片	4.1	8.1	2.3	66.6	硅質頁岩	
図3-1-1		O-15	II	剥片石器	石核	9.1	14.1	6.1	12.6	硅質頁岩	8点の複合資料
図3-1-2		O-15	II						10.1		
図3-1-3		O-16	II						273.8		
図3-1-4		O-16	II						43.9		
図3-1-5		O-16	II						27.0		
図3-1-6		O-16	II						6.8		
図3-1-7		O-16	III						123.3		
図3-1-8		O-16	III						18.8		
図3-2-1		K-14	II	剥片石器	石核	10.0	11.4	7.0	564.5	硅質頁岩	2点の複合資料
図3-2-2		L-11	III						2.5		
図13-3		-	表層	剥片石器	石核	1.9	3.6	1.9	10.3	硅質頁岩	
図13-4		L-17	II	磨石器	削製石斧	(2.2)	(3.7)	(1.3)	8.0	綠色板岩	
図14-29		O-15	II	磨石器	穂石	3.2	2.8	1.0	6.4	硅質頁岩	
図14-30	S31調査区	K'-5	埋土	磨石器	穂石	(3.8)	(2.1)	(1.6)	10.9	麻灰岩	
図14-31	S31調査区	K'-5	埋土	磨石器	穂石	(4.7)	(3.4)	(1.5)	14.5	麻灰岩	

表5 土製支脚観察表

図版番号	造様名	出土位置	層位	長さ(cm)	体形端(cm)	重量(g)	外形	内孔形	内孔径・長(cm)	備考
図14-15	S31調査区	K'-5	埋土	(7.4)	(4.3)	52.2	多角柱状	円筒	(0.40)	体部片
図14-16	S31調査区	K'-5	埋土	(4.2)	(3.4)	16.5	多角柱状	円筒	(0.40)	体部片
図14-17	S31調査区	B-6	埋土	(2.4)	(2.4)	8.1	多角柱状	円筒	(0.40)	体部片
図14-18	S31調査区	K'-5	埋土	(3.2)	(2.6)	13.1	多角柱状	円筒	(0.40)	体部片
図14-19	S31調査区	K'-5	埋土	(2.7)	(3.0)	12.2	多角柱状	円筒	(0.40)	体部片
図14-20	S31調査区	K'-5	埋土	(3.8)	(4.1)	25.4	多角柱状	円筒	(0.40)	体部片
図14-21	O-10	II	(3.2)	(2.6)	15.1	多角柱状	円筒		(1.2)	体部片
図14-22	S31調査区	B-6	埋土	(4.1)	(3.3)	19.7	多角柱状	円筒	(0.7)	体部片
図14-23	S31調査区	K'-5	埋土	(4.1)	(2.8)	14.0	多角柱状	円筒	(0.40)	体部片
図14-24	S31調査区	K'-5	埋土	(3.5)	(2.3)	7.1	多角柱状	円筒	(0.7)	体部片
図14-25	O-9	II	(2.2)	(4.2)	13.5	多角柱状	円筒		(1.2)	足・脚部
図14-26	S31調査区	B-6	埋土	(4.0)	(5.0)	41.1	円柱状	円筒		体部片
図14-27	O-16	II	(2.6)	(4.0)	15.0	円柱状	円筒		(1.2)	体部片
図14-28	S31調査区	B-6	埋土	(2.8)	(3.9)	11.1	円柱状	円筒	(1.0)	体部片

表6 鉄生産関連遺物観察表

調査番号	遺構名	出土位置	取上番号	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
調9-11	S101(鉄)		P-X	床面	鉄製品	39	52	25	32.1	板状
調9-12	S101		P-X	2層	鉄薄	(52)	(63)	30	81.1	錫型溝 合族小?
調9-13	S101		P-2	床面	鉄薄	(39)	28	12	15.7	印内銅動浮か?
調9-14	S101		P-2	床面	鉄薄物	(38)	(26)	11	5.8	ガラス質
調14-22	試掘トレンチ1	W-10~13	P-X		鉄薄	(33)	(44)	21	45.1	印内浮か?

表7 陶磁器観察表

調査番号	遺構名	出土位置	P番	層位	種類	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面文様	内面文様	備考
調14-33	試掘トレンチ1	W-10~13	P-X	表孫	器頭	圓	口縁部			(1.6)		圓小?	肥前IV~V期
調14-34	試掘トレンチ1	W-10~13	P-X	表孫	器頭	小曲?	腹部			(1.3)	□クロ・灰釉	□クロ	

表8 銭貨観察表

調査番号	遺構名	出土位置	取上番号	層位	種類	銘文	外縁外径(cm)	外縁内径(cm)	内縁外径(cm)	内縁内径(cm)	外縁厚(cm)	文字墨厚(cm)	重量(g)	備考
調14-25		W-20	銭-X	I	銅銭	寛永通寶	25.13	19.73	7.31	6.04	1.21	0.58	2.5	寛永通寶2厘(重見) 寛文8年(1665)石鏡



調査区空中写真（南西→）



調査区空中写真（東→）

写真1 遺跡近景



物崎からの遺跡遠景（西→）



基本土層（東→）

写真2 遺跡遠景・基本土層



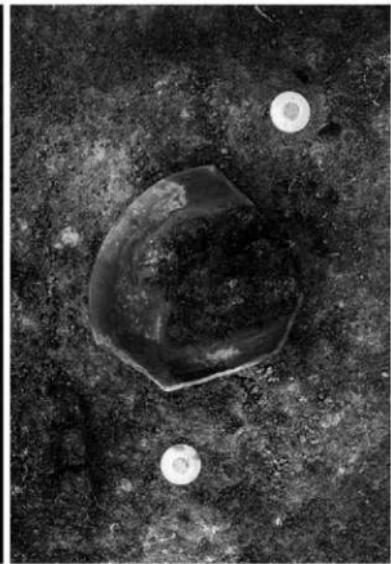
写真3 作業状況



第1号竪穴建物跡（新） 遺物出土状況（南→）



遺物出土状況（北東→）



遺物（9-2）出土状況（南西→）

写真4 第1号竪穴建物跡（新）(1)



第1号竪穴建物跡（新）遺物（9-3）出土状況（北西→）



第1号竪穴建物跡（新）完掘状況（南→）

写真5 第1号竪穴建物跡(新)(2)



第1号竪穴建物跡（旧） 完掘状況（南→）

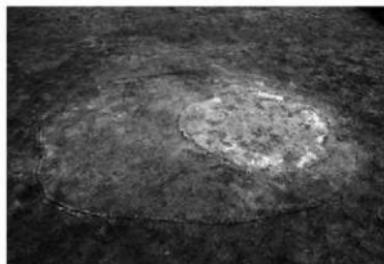


第1号竪穴建物跡 B-B' 土層断面（西→）

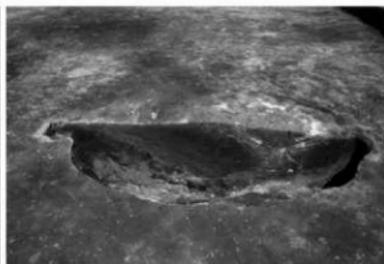


第1号竪穴建物跡 A-A' 土層断面（西→）

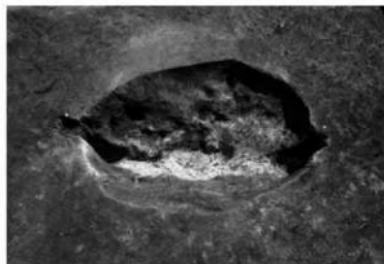
写真6 第1号竪穴建物跡（旧）



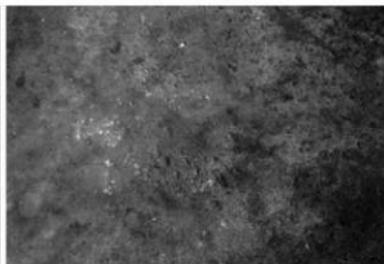
第1号土坑 检出状況（西→）



第1号土坑 土層断面（西→）



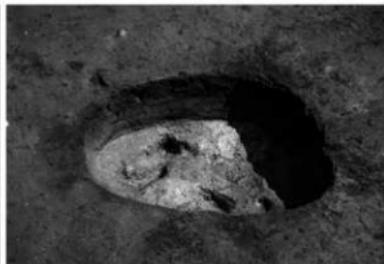
第1号土坑 完掘状況（西→）



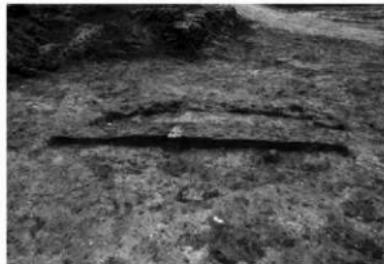
第2号土坑 检出状況（南西→）



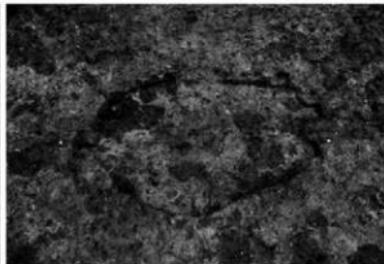
第2号土坑 土層断面（南西→）



第2号土坑 完掘状況（南西→）

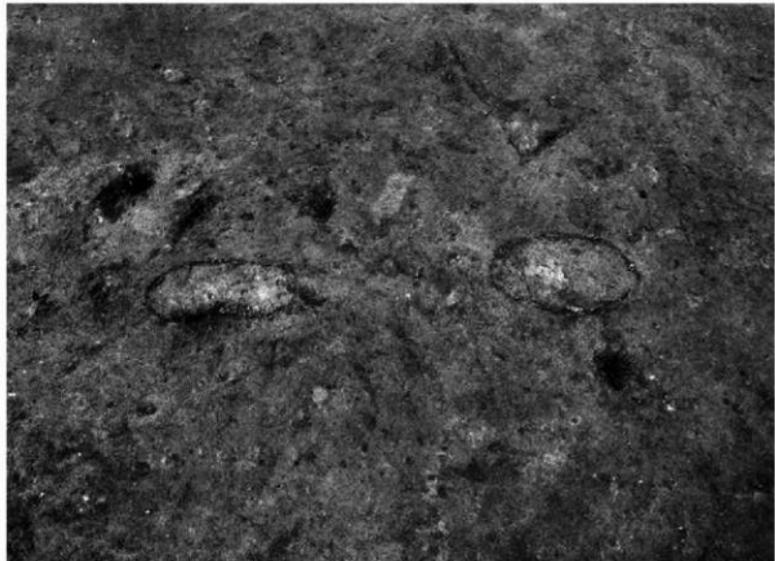


第3号土坑 土層断面（北西→）



第3号土坑 完掘状況（北西→）

写真7 土坑



第1号焼土遺構 検出状況（南西→）



第1号焼土遺構 断面（南西→）

写真8 焼土遺構(1)

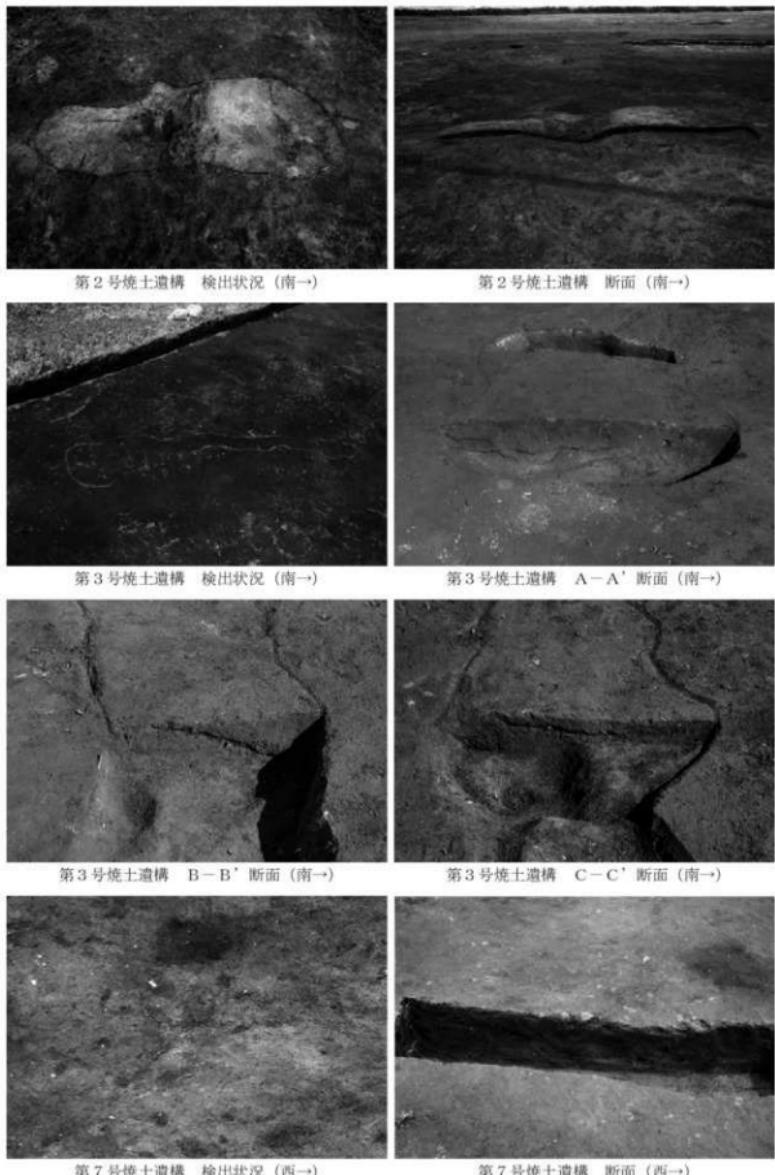


写真9 焼土遺構(2)



調査区完掘状況（第II層面）（西→）



調査区完掘状況（第III層面）（東→）

写真10 調査完了状況(1)



調査区完掘状況（第IV層面）（西→）



調査区完掘状況（第IV層面）（東→）

写真11 調査完了状況(2)

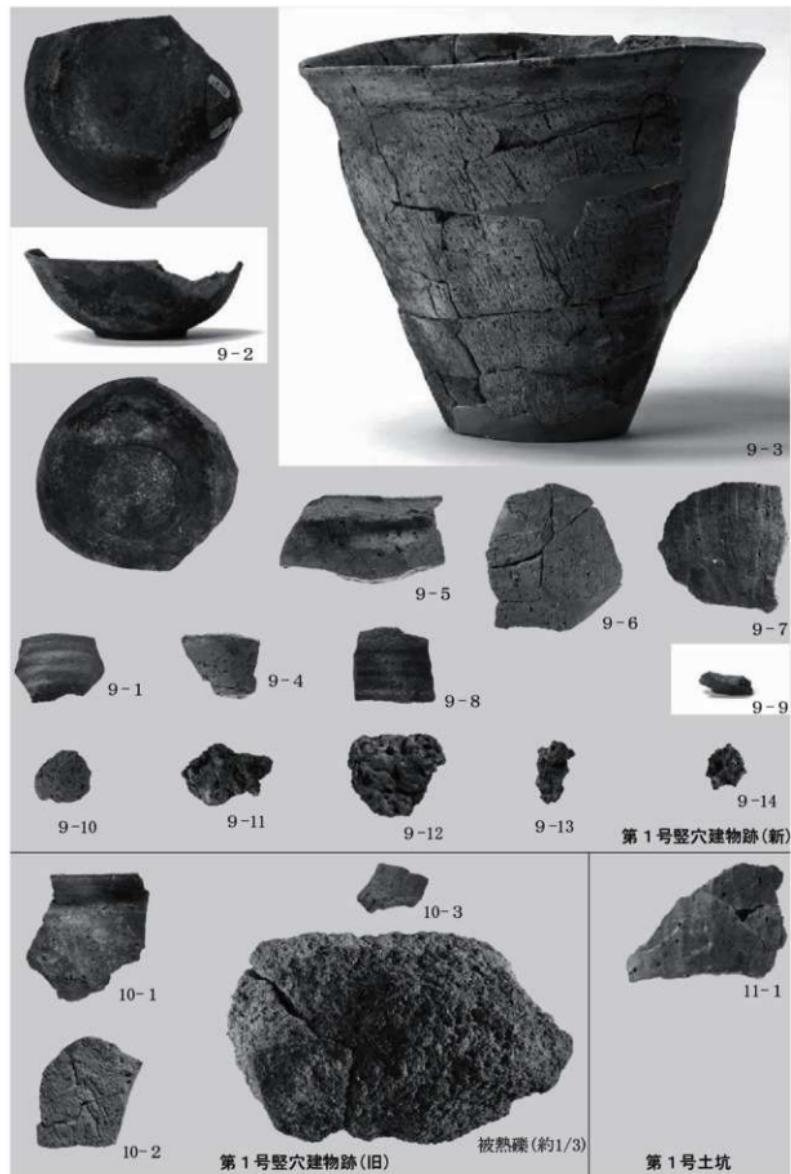


写真12 遺構内出土遺物

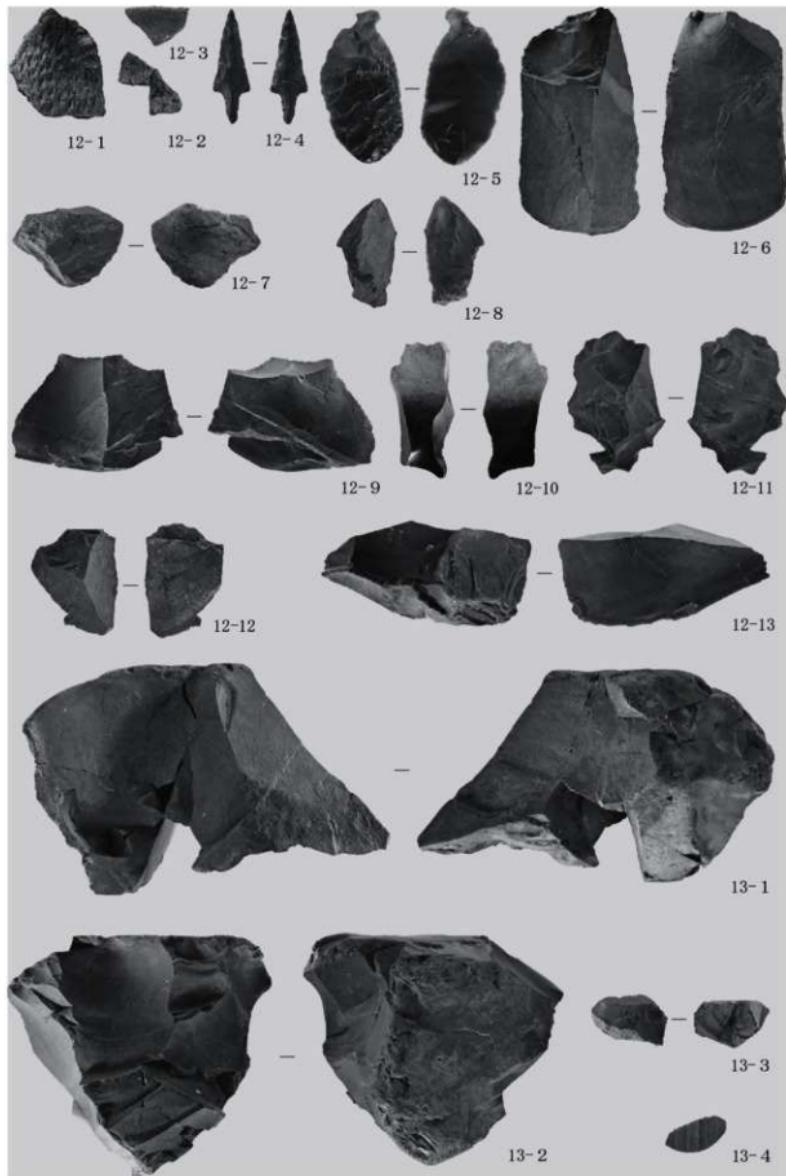


写真13 遺構外出土遺物(1)

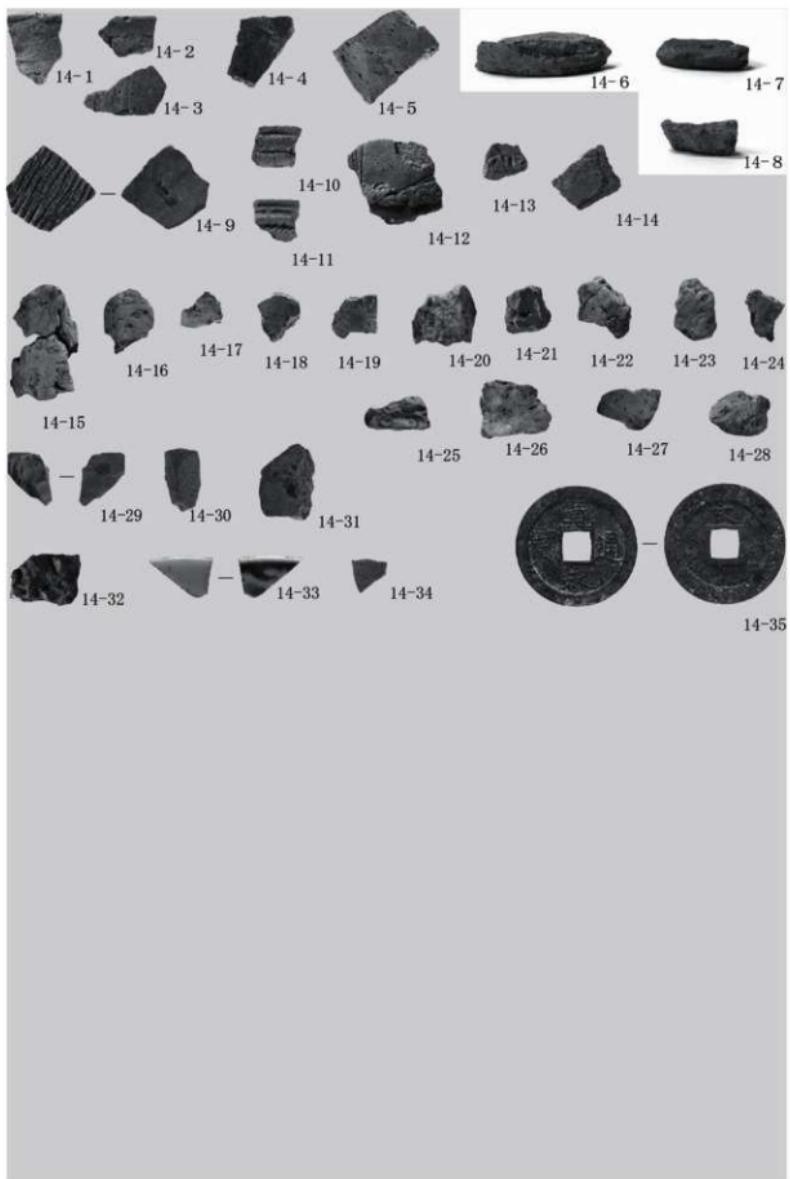


写真14 遺構外出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	うわのたいらいせき							
書名	上野平遺跡							
副書名	国道338号交通安全対策事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第627集							
編著者名	平山明寿 笹森一朗							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2022年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2011)		調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
上野平遺跡	青森県むつ市 川内町宿野部 上野平	02208	208097	41° 10' 26"	140° 55' 47"	20200512 20200717	1,500	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上野平遺跡	集落跡	縄文時代	堅穴建物跡	1	縄文土器（前期） 土師器・須恵器			
		平安時代	土坑	1	擦文土器 鉄生産関連遺物			
要約		平安時代以降	土坑 焼土遺構	2 4				

当遺跡は陸奥湾沿岸に位置する平安時代の集落遺跡で、存続期間は10世紀中葉以前から11世紀にかけてであると推測される。

縄文時代の遺構は検出しなかった。遺構外から縄文時代前期と推定される縄文土器と、石罐・石匙・スクリペリー・二次加工のある剥片・微細剥離のある剥片・石核・剥片・磨製石斧が出土したが、散布的な出土であった。

平安時代の遺構は堅穴建物跡 1 棟・土坑 1 基を検出した。本建物跡は同じ場所で造り替えられており、S101（新）の規模はS101（旧）より小さく、S101（旧）の中に入子状に構築している。第1号土坑は最終堆積層に苔小牧・白頭山火山灰が堆積していた。遺物は土師器・須恵器・擦文土器・土製支脚・砾石・鉄生産関連遺物が出土していることから、北海道との関連をもち、また、調査区周辺で製塩・鉄生産を行っていたと推測される。

土坑 2 基と焼土遺構は、検出層位から平安時代以降の年代が考えられる。

青森県埋蔵文化財調査報告書 第627集

上野平遺跡

—国道338号交通安全対策事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2022年3月16日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15

TEL017-788-5701 FAX017-788-5702

印 刷 株式会社新印刷興業

〒030-0142 青森県青森市大字野木字野尻37-728

TEL017-739-6431 FAX017-762-1804
